

ともしなかつた。

「いやいや、佐殿のお怒りは重々御理由のあることでござる。大事な西上の御發向に、馳せ遅れ申したは、廣常が一代の不覺と、慚愧にたへませぬ。一たんこゝを起つては、殿のお憤りに對し、たとへ一時でも、廣常が不平を抱いて去つたかと思はる、惧れもござれば、殿のお怒りが解くる迄は、こゝに坐して、謹慎してをる所存でござる。どうぞ眼の外にお置き下されい」

いつか陽は高くなる。

馬には糧を飼ひ、兵は朝の兵站に忙しない。

對岸から傳令が来る。

又、一群の騎馬が涉つて来る。

それらも皆、江戸、河越、甲府、秩父などの諸地へ行つた使者の戻りや、或は、その返書を齎して来る先方の使などであつた。

石濱宿の住民が、隅田川で漁つたといふ鮮魚を小舟で獻上に来た。それから少し後、附近の

神社の神官や士民の長が、連れ立つて、拜禮を遂げて歸つてゆく。

陽はいよ／＼高くなる。

「聞いたか」

駒寄場の邊りで四、五人の兵が大聲ではなしてゐる。

「けさの早打によれば、この月の九日に、帯刀先生義賢様の御次男、木曾義仲どのにも、旗擧げして、等しく、以仁王の令旨をかざし、山道の地方から、都へ都へと、所の平家を打破つて、攻め上つてをるといふことだぞ」

「ほ！ それは初耳だ。——だが、こちらにも吉報がある」

「何か」

「伊豆では、平家方に立つて、三浦殿を惱ました秩父の畠山重忠が、一族の衆、數人を使として、何やら殿の御前で謀し合せて歸つた。——お味方に參會せんとの前觸れとおれは見たが」

「武田太郎信義どの以下、甲斐の源氏も、どこかで合流するといふ。江戸、河越も、けふ明日には向背を決めてくるだらう」

兵のうはさは、單にうはさだけのものとも見えない。その半日の間だけでも、三十人四十人と一隊になつて、舟で海口から溯つて来る者や、騎馬徒士立ちで、對岸から川を越えて參加し、或は、隨身を願ひ出る者が、やゝ大袈裟にいへば、ひきもきらない有様であつた。さうして、隨身した兵は、すぐ勞役を命じられた。半日の間も遊ばせてはおかないのである。附近の民家を壊したり、小舟を集めて大河を貫く舟橋の架設に向けられたり、軍器の入手、兵糧の徵發、あらゆる方面に働いてゐた。

『……………』

廣常は、まだ坐つてゐた。

つい先頃までの彼は、頼朝の召をうけても、彼は去就に迷つてゐたのである。が、今晚こゝへ來る時には、もう肚は極つてゐた。

——味方と見せて、二萬の兵をもつて包圍し、一舉に討つてしまふ——であつた。

彼の考へは、三度變つた。

——會ふ要はない追ひ返せつ。

と、頼朝から案に相違した叱言を聞いたせつなに又變つたのである。——これは。この人物は。とさすがに長い生涯を通つて來た老將だけに、初めて頼朝の人間を見直したものであつた。

『誰ぢや。そこにをる爺は』

何かの指圖に、陣の外へ歩み出て來た頼朝は、まだ、大地に擬と坐つてゐる上總介廣常を見かけて、

『あれは、何者か』

と、もう今朝の事など、忘れてゐるやうな——その實、忘れてゐないらしくも見える顔をして——傍らの土肥二郎實平に訪ねた。

『上總介どのに御座ります』

答へると、

「何。廣常か」

「はい」

「まだ居つたのか」

「お怒りの解けぬうちとはと——」

「ああ、それほど迄に」

大きく、頼朝は云ひながら、自身つかくくと廣常の前へ歩み寄つて、

「老人、御足が痛からう」

と、軽く彼の肩をたゝいた。

「——あつ、これは」

あわて、廣常が、手をつかへかけると、頼朝は、その手を掬ひ取つて、

「挨拶はあちらにて受けよう。さるにても御勘忍のつよい事ではある。頼朝は今、こゝ生涯の

門立ち、死にもの狂ひの氣と、秋霜の軍律をもつて臨んで居り申せば、自然嚴かに過るとも、

微塵、日頃の私情や妥協は持ち合はさぬが——ようその軍律にお伏しあつたぞ。味方共の心も

これでよけいひき緊まらう。もうよい。——いざ、こなたへ御座れ」

と自身、自分の幕營のうちへ、手を取らぬばかり有りながら導いて行つた。

で、廣常は漸く、源氏の御味方たることを許されて、初めて自分の陣所へ歸つた。

けれどもまだ納まらないのは、彼の肉親たち諸將の輩だつた。——その夜、營内に廣常を

取圍んで、無念の涙さへたゝへながら、

「いつたい何故あつて、あんな辱しめをうけながら、誰にも出来ぬ御勘忍をなされたのです

か——それとも飽まで彼に油斷をさせて、後日、頼朝の首をあげて、一度に、御鬱憤をはらさ

うといふ御計略ですか」

と、詰問り寄つて彼の眞意を打叩いた。

廣常は首を振つて、

「いやさうではない。わしは今日といふ今日ほど膽を潰された例はこの年までまだ覚えぬこと

だつた。——で、眞實、あの殿には、頭が下つたのぢや。そち達も、以後二心なく、あの殿を

もり立てゝ行つたがい、」

そして彼は猶、次のやうに自分の観るところと、一つの例を、一族の後進のために説いて聞かせた。

天慶のむかし、この東國で平將門が亂を起した時、人のわるい藤原秀郷は、わざと彼の人物を視てやらうと、加勢と偽はつて會ひに行つた。

すると將門は歡びの餘り、結びかけてゐた髪のみすびも結びあへず、冠をつけて客座に出て來た。その様子の輕卒なのに、秀郷は、愛想をつかして戻つて來たといふことが云ひ傳へられてゐる。

それに反して。

頼朝のけふの態度は、見上げたものと云つていゝ。今、天下は平相國の領地でないところはなく、平家の與黨の住まぬ地は一郷一村とでない程なのに、一流人から起つて、わづか三十餘日、麾下の武者とて五、六百の小勢に過ぎぬ微弱を以て、この廣常が、二萬の大兵をひきつれて加擔に罷り出たとあれば、將門が秀郷を迎へたよりは、大歡びに歡ぶかと思ひのほか、遲參の條、緩急至極。

と怒つたのは、怒られながらも實に快い事だつた。將たる器は實にあななければならぬ。おそらく、こちらの肚も觀ぬき、その効果をねらつて怒つた事かもしれぬが、それにせよ行末頼もしい大將といふ資格に變りはない。

大事はあの御方の手に依つて成し遂げられるにちがひない。そち達も、もはや迷ふな。——もつとも誰よりも一番迷つてゐたのはこのわしちやが、今日以後、上總介廣常はまぎれない頼朝殿の股肱であるぞ。くれぐれ生涯の方向をそち達も過つてくるゝなよ——と、廣常は、夜更けるまで語りつゞけた。

忘驚の人々

一

相模の大庭景親から出した注進の早馬が、京都に着いたのは、九月一日だつた。

忘驚の人々

六波羅では、

『片づいたな』

と、軽く見て、すぐ注進の一通を太政入道の手元へ。べつの一通は役人たちで開封した。それより前に。

流人兵衛左頼朝謀叛、連ニ山木ノ館ヲ圍ミ、

判官兼隆ヲ殺戮シ、放火焼失シ終ンヌ。

といふ飛報はあつたが、

兇徒、ワヅカニ三、四十名ノミ。

とあつたので、

『なんぢや、人騒がせな』

と笑つた程であつた。

次の早打には、

——兇徒、勢ヲ得、三百餘人、石橋山ニ立籠ル。

と見えたが、その僅少な徒黨に對して、伊豆、相模、武藏の平氏が何千と馳け向つたといふので、

『でも、大仰な……』

と、猶、嘲つてゐた。

今、景親からの三度目の報告を聞いてみると、案のぢやう、その文には、

二十四日曉天。

頼朝、堪へ得ズシテ、遂ニ當所ヲ退キ、不知行方。

或説ニ曰フ。穴ヲ掘テ自ラ埋リタリト。

又、説ヲ爲ス者曰フ。

石ヲ抱イテ水ニ入レリト。

巷説多端、ソノ首ヲ見ザレバ確メ難シト雖モ、滅亡ノ條勿論歟。

「は、は、は。石を抱いて水に入る——はよかつたな、火へとびこめば夏の虫だつた」
一場の笑ひばなしと過る中に、景親に對しては、兇徒といふかどで、恩賞の沙汰すら議され
てゐた。

入道相國の身近に出入する大將のひとりから洩れたはなしでは、頼朝謀叛と聞えた時、入道
はひどく不機嫌ないろを示し、

「恩知らずの童めが」

と、口汚く罵つたが、次々の報告などには、一向さしたる關心も持たず、たゞ最後の景親の
早打を見た時は、

「ばか者である！」

と、暑い日に、一杯の冷水でものんだやうな顔をしたといふ事であつた。

福原の海岸へは、ことしの夏も、知盛、維盛、忠教、敦盛など一門の大家族が、各々の別荘
へ、みな避暑に赴いてゐるが、秋風と共に、遊び飽きない姫や公達輩も、漸く、都へもどつて
來た頃だつた。

その都は又、秋は秋とて、やれ月の宴とか、管絃の會とか、詩歌三昧などはまだ清遊のはう
であつた。歌へば淫らだし、語れば戀とか喰物の事とか、官職のあばき合ひとか、人の陰口
とか、そんな範圍でしかなかつた。

この世は遊ぶためにあつて、百姓庶民は自分たちを遊び飽かせる爲に生きてゐる——さう
いふ公達の頭には、太政入道が空脛の青年時代に、瀕死の親の醫者を迎へるため醫師へ行つて
も來てくれず、藥價の算段に歩いて何處でもすげなく斷られ、垢じみた破れ直垂一枚で、冬
空の下を、

今に見ろ。

今に見ろ。

と、水ツ漣をすゝりながら獨り力み泣きに鼻づらを赤くして泣いた事もあつた——などとい
ふはなしは、誰も清盛から二度三度は聞かされてゐる筈だが、まるで遠い遠い昔ばなしの事
でもあるやうに、ひとりとして身に思ひ出してみる者もなかつた。

そんな孫どもや子息や又、それにつながる係累の救はれない生活ぶりを眺めてみると、太政

忘驚の人々

入道は、時にひとり憤ろしくなつて、

『いつその事、天譴があらはれて、こんな痴兒はみな、海嘯に攫はれてしまへ』

と、世の爲に憂ふることもまゝあつたが、時しもあれ、九月下旬、

兵衛佐頼朝、其後モ生存アツテ、武總ノ隅田河原ニ陣シ、千葉、上總、

甲信、武相ノ諸源氏ヲ語ラヒ、兵員三萬餘騎ト聞エ、ソノ勢逐日熾烈。

と、ある諜狀を手にすると、勃然と怒りを東へ向け變へて、日頃、唾棄してゐる都の現状や一門の繁榮を擁護する權化となつて、すぐ討伐の軍議を命じた。

二

嘘みたいに皆思つた。

信じようとしても、信じられないのである。

石橋山から行方知れずになつた頼朝が、わづか一ヶ月の間に、總勢三萬餘騎で、隅田川をこえ、大井をこえ、徐々、西上して來る形勢だといふ。

いや。それ所でない。次々と、情報のはいる度に、三萬騎が五萬騎となり、七萬騎に近いといひ、果は、十萬餘騎

の軍勢と傳へてくる。

『ばかな』

『あわて過ぎてをる』

『理に合はぬ事ではないか』

理に合はなければ、彼等は得心しないのだ。しかもその理論は自分たちの觀念を基數として立てたものでなければ肯定できない。

いつしかさういふ習性を以て最も優れた階級の上にあるものと自分たちの知識を誇つてゐた。

——それと。

もうひとつ、彼等の知性のうちには不思議な病症が漾つてゐた。

それは。

忘驚の人々

驚かない！

といふ奇異な麻痺であつた。

どんな事が起つても驚かないのである。

たとへば。

ひどい早魘がつゞいて、諸國窮民にみち、道にあはれな屍臭が深ひ、都下の穀物は暴騰し、巷の顔は干からび、御所の穀倉すら貢物なく、人々はどうなるかと嘆息してゐる——と聞いても彼等は驚いた顔もしない。

「困る者は困るばかりに追ひこまれてゆき、富有な者は、平家一門の風をまねて、世をも人も恐れぬ贅澤ばかりして顧みないと聞いても——彼等はべつに驚かない。

日常、事々に、驚くことを忘れ果てた人々は、この春、源三位頼政が、あんな現實的に、血をもつて、世の苦惱を示しても、猶、さう驚きはしなかつた。

(それみろ、すぐ片づいてしまつたではないか)

と、むしろ騒動の後のいろ／＼な話題を興がつて、暫くは退屈をなぐさめられた位な顔して

ゐた。

あらゆる角度から観て、世の中の大きな意志は、少しづつ方向を更へてゐる。それは、巷に歌はれる童歌にも、力のない百姓の顔いろにも、何か倦み飽いた顔してゐる市人の眼にも、明らかに、現れつゝある事だつたが、そんな大勢などには、當然、驚くわけもない。

華美に驚かず、美食に驚かず、果は、あらゆる自分等の生活のまはりには、良き驚きを失つてゐる神経は、たうとうこの月、木曾義仲が擧兵の報を北方から聞いても、頼朝が西上の急を東から聞いても——なほ依然として、驚かない評定をつゞけてゐたのであつた。

「近頃、をかしなうはさを耳にしたぞよ」

その評定も、ともすれば、雑談にばかり流れ易かつた。

「又、うはさか。よくいろ／＼なうはさが飛び出す。頼政にかつがれて、宇治で御最期遂げられた以仁王が、まだ生きていらつしやるといふ巷説ではないか」

「さうぢや。御身もはや耳にされたか。——生きてをられる位はまだよろしいが、それが、頼朝の陣中にあつて、指揮に當つてをられるといふのぢや。その爲、何十萬の源氏が立ちどころ

に寄つたといふのぢや。……さも、眞しやかによ。アハ、ハ、」

『は、ハ、ハ、』

一方で軍議してゐるかと思へば、一方では笑ひどよめいてゐるといつた體たらくである。そして早くも、この席が終つたら、こよひは何館の池殿へ寄つて酒を飲まうか、管絃して遊ぼうか、そんな事にも思ひの忙しない顔つきも澤山に見えるのであつた。

さういふ驚かない鷹揚な顔ばかりの中で、老いても猶、驚く神経を待つてゐるのは、太政入道の清盛だけであつた。

彼の側近くまで進み出て、何か頻りと獻言してゐる齋藤別當實盛のことばを熱心に聞き取りながら、清盛は、大きく呻いたり、首を振つたり、重盛を亡くしてから老來とみに悄沈してゐた彼も、遽に、驚きに甦つて、嬰鑠と持前の生命力をてか／＼と顔ぢゆうに光らせて來たかの如く見うけられた。

三

頼朝々々といふ聲が、しきりと喧傳されてから、一般の民間では初めて、

『さういふ人が、まだ東國とやらに生きてゐたのか』
と、氣がついたふうだつた。

今更のやうに、彼等は、平治の亂や保元の頃の憶ひ出を、新に語りだして、二十年の歲月をふり顧り、遽に、世の中の變貌に目をみはり出した。

『さうさう、あの折、六條の頭殿の遺子といふ幼な子が、粟田口から押立の役人衆にかこまれて、伊豆國とやらへ流されて行つた——』

『その下の乳呑みは、鞍馬へ追ひあげられ、稚子となつてゐたさうぢやが、いつの間によら、それも巢立ちして、陸奥へ逃げ走つてしまふたとか』

『鷹の子は、鷹の子よの』

『何しても、早いもの。もう二十年経つたか』

話題には興を抱いても、庶民たちはまだ他人事の氣がしてゐた。それから二年後には、その頼朝の政治下に生活したり、その義經の支配下に京都が守護されたりして、自分等の生活にも

忘驚の人々

今、刻々と變革が近づいてゐるのであるなどとは思ひもしてゐなかつたのである。

それでも、民衆は、いよいよ六波羅の軍勢が、五萬餘騎も編成されて、

頼朝追討

と稱して京都を進發した當日には、辻々へ山のやうに見物に出て、その物々しさに、意外な顔をしてゐた。

『こんな大軍で向はなければ討てないほど頼朝も大軍を持つてゐるのか』

と、遽に、頼朝の存在と、事態の重大さを感じて來た顔つきだつた。

二十年前、十騎に足らぬ押立の役人と、五、六人に足らぬ身寄にかこまれて、配所の伊豆へ送り遣られた哀れな一少年のすがたは、まだ記憶してゐる者がたくさんあつた。

『その日も、この辻でな……』

と、見物しながら、當年の有様をはなしてゐる人々も多かつた。

道も同じ六波羅の大路から粟田口——蹴上、大津の關へと、華やかな軍馬の列は流れて行つた。

大將は平維盛、忠度のふたりであつた。齋藤別當實盛が、東國の事情にくはしいので、案内として、幕僚の諸將のうちに從いてゆくのが目についた。

その一人々々の扮装だけでも、目のさめるやうな美々しさであつた。兜、鎧の華やかさは云はずもがな、黄金の太刀、白銀の小貫、矢壺や鞍にいたるまで、時代の名工が意匠の粹を凝した物づくめであつた。一すぢの箭にしても、羽は鷹の石打、塗は誰、鐵は誰が作と、切銘してその優美を誇るに足るものだつた。——それが坂東武者の粗鐵のかぶとや鎧に射當つて、突き貫るか、刎ね返されるかは、別問題であつた。

海道を下つて、興津の濱あたりに陣した時、維盛、忠度の二人の大將は、案内者の齋藤別當を間近く呼んでから、眞面目に質問した。

『いつたい、頼朝の手勢の中には、其方ほどな弓勢の武者が、どれくらぬ居るのか』

問はれた實盛は、世にも情ない顔をした。餘りにも認識の足らない大將たちではあると思つたが、その認識不足を補佐することが、多年、恩顧のある入道相國から託された自分の任務であつたと思ひ直して、

『何を仰せられます。この實盛ごときを、よき者と思し召てか』
と、齒に衣きせず云つた。

『弓は三人張、五人張をふつうに引き、一矢に二人三人を射仕す者はいくらも居ります。日頃の稽古にも、鎧の二領三領は射貫き、總じてあだ矢を射る者などはをりません。馬は、牧の内から心まかせに逸物を選び取り、朝夕、山林や野を馳けて、鍛へに鍛へた駒ぞろひです。——又、坂東武者の習ひとして、父が死ねばとて、子は退かず、子が斃れればとて、親も退かず、一族肉親の屍を踏みこえくするほど、一念を固め、いやが上にも強くなるのが持ち前です。あります』

維盛も忠度も、半信半疑に、唾をのんで聞いてゐた。

鶴ヶ岡

—

鎌倉へ。

鎌倉へ。

一兵卒にいたるまでこの目標は持つてゐた。分りのよい相言葉だつた。

忽ち、それは時の聲となり、揃ふ足なみともなつた。軍隊の中だけではない。庶民の生活目標までが何んとなく、

鎌倉へ。鎌倉へ。

と、意志づけられた。その足なみから外れると、時代の流れに置き去られる氣がした。

——京都へ。六波羅へ。

鶴ヶ岡

頼朝がさう云つたら、或は、危なげを抱いて、一齊に従いて來なかつたかも知れなかつた。けれど、鎌倉と聞けば、源氏發祥の地——坂東武士の心の故郷——天嶮の地勢——民心はかへつてその新鮮な土の香と、次の建設を逞しく想像した。

どの顔も、どの顔も、秋の陽に焦けて眞つ黒である。眼ばかりが光つてゐる。甲冑も粗末なのが多い。弓も箭も手拵へのたゞ頑丈なのが多い。——さういふ將兵が何萬何千か知れないほど通つた。

細谷川の水も草間の小川も、すべてを抱擁してゆく大河のそのやうに、頼朝の軍は、行く行く投降者を收めたり、迎へ出る郷軍などを加へて、十月の六日、鎌倉へ着いた時は、人家もまばらなその漁村や農士を、いちどに人と馬で埋めてしまふ程だつた。

土地の郡司や村の長など、一かたまりになつて迎へに出てゐた。頼朝は馬上から一瞥を與へ、「龜ヶ谷とはどこか」

と、いきなり訊ねた。

北條、千葉、土肥、その他の諸將も、そんな地名を聞くのは今初めてだつたから、ふと不審

な顔をした。

「遠くではござりませぬ。ならば御案内いたしませうか」

「さうだ……ともあれその、龜ヶ谷まで参りたい。先に立て」

そこは佗しい稲田と松並木の南にあつた。扇ヶ谷、泉ヶ谷などと呼ぶ山間の濕地と同じだつた。頼朝は甚だ自分の想像と違つてゐたらしい面持で、

「あ。狭いなあ！」

駒を降りるなり、傍の北條時政、土肥二郎、千葉常胤などを顧みて、いかにも惜さうに云つた。

「お狭いとは……。御陣地のことで？」

「いや何。わしはこの龜ヶ谷へ、わしの居館を建てようかと、道々も、その殿樓や門造りなど、頭に圖を描いて來たのぢや。……が、來てみれば、案外の狭さに、失望したのだ」

「お住ひの地相をお選びなれば、この廣い鎌倉中、御意のまゝで御座いませうに」
「いやいや。龜ヶ谷には、亡父義朝が在世の頃、暫し住んでゐたと聞いてをる。それ故に、住

まばこゝと思ふたまでよ……。何ぞ、その頃の遺物らしき土臺石でも残つてゐないか』

『あれに、古い堂宇が見えまするが』

『さてこそ。父の歿後、岡崎義實が建てた一梵宇とはこれであらう』

頼朝は、つか／＼歩み寄つて前に立つた。——無言のまゝだつた。掌を合せるとすぐ退がつて来た。

鎌倉の第一夜を、彼は民家に泊つて明かした。翌日は彼自身、鎌倉中の地を視歩いて、大倉郷の地を選定した。決めるとすぐその日から崖を切崩し、小川を埋め、忽ちどこからか巨石や用材を運ばせて、建設の礎をすゑてゐた。

二

頼朝の口から出る命令には、すべてに互つて、

——息をもつかせじ。

とする氣合が見えた。

安房を立ち、隅田川を發し、鎌倉へ着いてからでも、何事にまれ、明日を待つて、といふ事はなかつた。

前進。前進。前進！ 踏み揃つてゐる打破と建設の足なみを、一步も弛ませまいとするものやうであつた。

もちろん彼自身の生活が、その足なみの先頭にある事はいふまでもない。彼自身が、閑を偷んでゐたり、ほつと息をついてゐたりして居ながら、全體の足なみだけが有る理由はなかつた。

——鎌倉の府ができ上つた後は知らず、今の彼は、創業の人だつた。革新の潮の先頭に置かれた時代志向の権化でなければならなかつた。

たゞの民家を一時の居館として鎌倉の第一夜を明かした頼朝は、早曉に、十萬の軍を閲し、諸將の口から、昨夜來、こゝへ馳せつけて加はつた新しい兵數の報告を聞き、その部將たちに目通りを與へ、又、老將千葉常胤や上總介廣常には、

『士民には、安心して生業にいそしむやう。兵には、軍律を遵守して、よく住民をいたはるやう、令を布き、札を建てよ』

と、命じた。

その足で、彼は、

『鶴ヶ岡へ参拜にゆく』

と、云ひ出した。

この事は、けふか明日には、必ずあらうと豫測してゐたので、列伍は立ちどころに整つた。畠山次郎重忠を先に、千葉介常胤の隊が後に、頼朝のすがたを護つて、肅々、道を進んだ。

道は、山之内村の耕地からやがて杉並木につゝ、またた木蔭にはいつた。巨福呂坂の下あたりから水の涸れた谷川に添つてゆくと、程なく、鄙びた板橋に丸木の欄をつけて赤く塗つてあるのが目についた。

『鶴ヶ岡か』

『さやうで御座ります』

左右の答へを聞きながら、頼朝は駒を降りて、もう大股にその赤橋を渡つてゐた。が。すぐ足を止めて、

『……此處か』

と、前なる山の影蒼や、木の間に澄む秋空を暫く仰いでゐた。

『静たなう』

諸將を顧みながら又呟いた。そして地上に眼をうつした。山清水のにじみ出してゐる其處此處に、小さな池が幾ヶ所かできてゐた。池には蓮の葉が破れ、赤い澤蟹が陽に戯れてゐた。

『——祖先、頼義公も、義家公も、また亡父義頼も、この道を何度かおひろひなされた事であらう。——わけて義家公には、この宮の祠前で元服なされたので、八幡太郎と名のられた。今頼朝又、こゝに詣でて平家を亡さん畢生の願をかけ奉るとは』

心あるものゝやうに、全山の樹葉は青々と喊の聲をあげて揺れてゐた。黄いろ葉、紅の葉は梢を離れて舞つてくる。——頼朝は、歩を移して、池から池へながれて行く小川に寄つて手を淨めた。

そこへ、急な使が来た。

伊豆の秋戸郷から来た侍たとある。頼朝は秋戸と聞くと、

『いゝへ呼べ』

と、その儘待つた。

使の侍は、餘りの晴がましさに遠く平伏したきりだつた。御臺所の御書面を携へて参りました者ですと云ふ。眼くばせして、頼朝は、畠山重忠の手を経てそれを受け取つた。

——なつかしや妻の文

と、顔にもそれは現れてゐたが封はひらかず、肌に納めてたゞ一言、

『政子は無事か』

と、たづねた。

『近ごろはわけてもお健かで居らせられまする』

と、使者が答へると、

『いづれ沙汰いたせば、それまで待つて居れと傳へよ』

さう云ふと、頼朝は、出迎への神官を先に立て、鶴ヶ岡の社前へ、静々、登つて行つた。

その夜、頼朝は手紙をかいて、伊豆へ急使を立てた。

妻の政子へである。

女といふものゝ身になれば、この二月ほどがいかに長いものであつたか。いかに辛い日毎であつたらうか。——頼朝は、その夜遽に妻が戀しくなつた。女の身を可憐しいものと思ひやつた。

一日、措いて、

『地形は早できたかな』

と、大倉郷の地ならしを檢分に出向いた。

わづか四日目にしかならなかつたが、その廣い宅地はあらまし整理されてゐた。

『早かつた』

作事の奉行大庭景義は賞められた。同時に、又、矢つぎ早に次の作事をいひつけられさうだ

つた。

『景義。あとはもはや石を礎え、屋を建てるばかりだの』

『されば、門石垣の粧ひなどいたせば限りもござりませぬが』

『まだ庭を見、出入の門を飾る遣はない。住むに足ればよいのだ。——左様に急を申したところ、當所の知事兼道の邸を、そのまゝ山内から移して組めば早からうと皆が云ふ。兼道も、あの家は正暦年間より一度も火災に遭うたこともない目出度い家、住み古したれど、當座の御用に獻じたいと申し立てをるとか。……さう致したら工事は幾日で出来あがるな』

『七日は要しませう』

『七日』

頼朝は、そこへ自分がすぐ住まうとは考へてゐないのである。一日もはやく妻の政子に、自分の手で造つた家と安心を與へてやりたかつた。

『續いて、そちへ作事を申しつけおく。速にせよ』

その日の黄昏から夜にかけて、もう移しい馬、牛、車などが微發され、千人をこえるであら

う人夫や兵卒が松明をかざし、材木や石の綱を曳き、山内と大倉郷との道すぢは、さながら戦場のやうな喧騒と赤い光でいぶつてゐた。

『道をひらけ。下に居れ』

そこへ、騎馬徒歩で三十人ほどの侍が、ひとりの婦人を乗せた輿を護つて、さしかゝつて来た。

『何ぢや。何者ぢや』

『どこの女性か』

人夫を指揮してゐる將のひとりが咎めると、

『無禮すな。これに在はすは、御臺所の政子の方様である。伊豆の秋戸の里よりお渡りあつて今この鎌倉へお着きなされたところだ』

『……あつ、御臺所で』

人々は驚いて牛を退け、馬を曳いて、わら／＼と土下坐した。

輿のうちには、美しい人の氣はひが窺はれる。簾のうちに在る政子の目には、松明の赤々と

いぶる中に、無数の武士が列を正し、士民は地に坐つて、自分を迎へてゐる有様が、何か、涙なしに見てゐられなかつた。

その總てが、良人の權威に見えた。良人の偉さに見えた。それにしても、わづか數名の兵を連れたのみで、房州へ落ちて行つたあの一孤舟の良人が、ふた月の間に、こんなにも大きな勢力を持つて自分を迎へてくれようとは、夢のやうな氣もしてならなかつた。

その夜、ふつうの民屋の何ひとつ飾りとして無い一室に、政子は、良人を見た。頼朝は、妻のすがたを見た。

夜はやゝ寒い一室には、白い燭のみがまたゝいてゐた。この夜は、二人にとつて、結婚の夜よりも、もつと清淨な情愛と、嚴そかなものを胸にうけた。

その清らかな魂と魂とを抱いて、ふたりは翌朝、又改めて、鶴ヶ岡へ詣でた。——頼朝はこの妻を、亡き父と祖先たちへ見参に入れた心であつた。

七日と日限した大倉郷の居館は、一日早く竣工して、その月十五日には、政子も頼朝も初めて——實に、頼朝にとつても二十年來初めての「わが家」に移り住んだ。

然し、頼朝が、そこに居たのは、たつた一日でしかなかつた。

水禽

一

維盛、忠度を大將とする平家の大軍が、頼朝、政子のため大急ぎで建築した假の館へ移つた。二日前の十三日に、駿河國の手越の宿に着いてゐた。

その早打を受けとりながら、頼朝が、たつた一夜でも、その假館に、妻と共に送つたのは、——そなたの爲に。

と彼は妻に云つたが、男たる者の胸には、べつな計があつての事であつた。石橋山から遁れて、甲州その他の方面へ遁れてゐた味方はかなり多い。加藤次景員、同じく景廉、伊澤五郎、逸見冠者光長などが、甲斐源氏の武田一族や、安田義定などと團結して、こ

水禽

れが駿河方面へ出、鎌倉の本軍と合流することになつてゐる。

それと、こんどの京勢との對陣は、今までの部分的な戦とちがつて、彼の主體と味方の主體とが初めて相まみえる大事な合戦と思はれたので——頼朝も輕忽にはうごき出さない肚らしく見えた。

『二千の兵は、鎌倉に残しておく。三百の兵は、この館の護りに付けて參る。今までのやうな變目はもう見せまい。又暫し、留守をしてるよ』

立つ日の朝。——それは十六日であつた。頼朝は、妻へかう云ひのこして、大倉郷の館を出た。

令は、すでに發しられてゐた。

鶴ヶ岡を中心として、數萬の兵馬は、彼の進發を待つてゐた。

頼朝は、三度、鶴ヶ岡に上つて社前に拜跪した。

この日の出陣の祈願は、この山初めての盛儀だつた。

歩り湯權現の良運は、大勢の僧をつれて會し、法華、仁王、軍勝の三部妙典を勸行して、鎮

護國家の禱りをあげた。

その日。

鎌倉の海は、波が高かつた。しかし、初冬の空はすみ風は冴えて、山下の數萬の兵も、その間、肅とひそまり返つて、禱りの心をひとつにしてゐた。

やがて——

進發の貝の音がなされた。

旗が、長刀が、うねくと、山傳ひに遠のいてゆく。けれど、後から／＼續く兵馬は容易に絶えなかつた。

別働隊の加藤次景康や甲斐源氏の輩は、駿河國で出會ひ、いよいよ奔河の勢を加へた。

二十日。——全軍は駿河國の加島についた。

『おゝ、見える』

武者たちは、物珍らしげに手をかざした。陣地となつたすぐ前には、富士川の大河が横たはつてゐる。けれど眼に大河はない。彼方の岸邊にひめられてゐる無數の幕と、そして柵や防材

を組んだ輩や、又、遠方此方の森や民家の陰にいたるまで、およそその見えぬ所はないほど赤い旗の翩翻と植ゑ並べてある盛観に、

『あな、目ざましい』

と、思はず眼をみはつたのであつた。

けれど、その感嘆は、坂東武者たちには、すぐ反対な苦笑になつた。

『さすがに、派手やか』

『うはさに聞く、福原の船遊びと、間違へてゐるのではないか』

『一矢、挨拶いたさうか』

『待て待て。まだ射よと命令の出ぬうちに、徒らな、弓自慣は、蔑まれようぞ』

その日は、陣の備へに、源氏は暮れた。

『はて。虚をついて襲せかけて来る様子もないが』

夜になると、陣の圍ひを出て、兵どもは、河原へ出て、敵方の陣地のうへに、ぼうつと赤く

映してゐる篝を眺めてゐた。

オーイと呼べば、敵の陣からもオーイと答へさうな氣がする。

この十數日は、大雨もなかつたので、富士川の水は、星明りでも底がすいて見えさうなほどきれいだった。河の中ほどにも、所々、洲肌が現はれてゐるのを見れば、流れのふかい所でも駒の脚で越え渡るに難くはなささうに思はれる。

『おい。…風のおひまに、笛の音がしてくるぞ』

『どこから』

『對岸から』

『嘘をいへ、この合戦に』

『いや、鼓の音らしいものも聞えてくる』

『氣のせるだ』

『さうかな？』

水 禽

さう思へば、さういふ氣もして、何より明らかに聞えるのは、やはり水の音と、葭の騒めきであつた。

そのうちに、何處かで、大きな人聲がした。水の中である。馬が陸へ跳ね上つて來た。驚いて馳けてゆくと、早い流れに浮き沈みして、人間が流れてくる。

『ばかつ、何うした』

網を投げて、救ひ上げてやると、それは馬を洗ひに下りた雑兵で、餘り流れが靜に見えるし、浅いとばかり思つてゐたので、つい深みへ墜ちて溺れかけたのだといふ。

『あは、まだ敵へ、矢一すぢも射ぬうちに、水に溺れたりなどしたら、故郷の親兄弟も、世間へ顔向けがなりはしないぞ。あわて者めが』

笑ひ聲が高いので、陣地の陰から一人の侍が出來て來て、叱りつけた。

『何をしてをるつ。身をかくせつ。馬を後へ曳き込めろ。この薄月夜に、いゝ的を出しておくやうなものだ』

兵たちは、あわて、陣地へ駆けこんだ。櫓や物陰には、むつとする程、汗くさい人いきれが

してゐた。

『いつ來るか？』

と、敵の夜襲に備へて、夕方、兵糧をつかつた後は、身じろぎもせず、弓をにぎり、太刀をつかみ、一刻々々、息をこらして、更けゆく富士川の水を睨んでゐるのだつた。

夜が明けた。

敵は來ない。——いや一矢の矢うなりも切つて來ないのだ。稀々、征矢のごとく水をかすめるのは、羽の青い小禽だつた。禽といへば、ゆうべ喰べこぼした兵糧の米つぶへ、無数の小禽が群れ下りて、刃の光りも、武者たちの楚音にも恐がらないすがたが、又なく愛らしい。

危険を冒して、河の深さを偵察に行つた者が歸つて來ての報告によると、中の洲から西方の主流の一脈が、最も激流で、又最も水深がある。その水幅は五十間足らずであるが、人馬の背丈であるから押し渡るとすれば、せひともそこでは、多數の犠牲者を出さねば渡河は難しからうといふ。

『なんのそれしきの激流。海ならば知らぬこと、馬を乗り入れて、一度に越えれば』

と、その日のうちにも、渡河戦を執行しようとの議もあつたが、數日前に着いてゐる敵さへ容易に越えて來ないところを見ると、想像以上、流れは早いのかも知れない。——又、それを利して、敵にも計のあることは明らかでもある。

『あつ、來たつ』

夕方、源氏は、自分たちの頭の上を越えてゆく矢の快い羽うなりに、眼をあげて、どよめき出した。

楯まで届かない矢が二、三十本河原に落ちた。さらばと、源氏方からも、五六騎河べりへ乗り出して、鞍上からキリキリと満を引きしぼつて返し矢を送つた。

その弓勢に恐れか、日没と共に、平家の陣はひそとしてしまつた。——今夜も淡い月が出てゐた。すこし雨雲りの空ではあるが、雲は断れてゐて、時折、雁の影がよぎつて行つた。

三

その夜、源氏方では、

『河を越え渡るには、未明を計つて、敵の寝込みを襲ふしかあるまい』

と、朝討の評議がきまつて、部將たちは、夜おそく、各々の陣地へ支度にもどつて行つた。

武田太郎信義は、第二郎忠頼、三郎兼頼の二人を連れて、そこから歸る途中、

『あすこそは、甲斐源氏の名に恥ぢぬやう、人に負れぬ先陣を取りたいものだが』
と、洩らした。

すると二郎忠頼が、

『お味方のうちには、われこそと、腕をさすつて、あすの一番乗を期してゐる面々が餘りに多すぎます故、尋常一様なことでは衆に優れた功名を揚げることはできません』

『いや、どうしても、あすの名譽は、甲斐源氏のわれ／＼が克ち取らねばならぬ。——伊豆、下總、上總、相模、武藏の味方たちは、年來お側に御奉公を遂げた者や、各地で戦つて來た人だが、われ等にとつては、あすこそ初の戦場だ。……こんな時こそ、生涯人の下風につくか上に立つかの、分れ目といふものだ』

『では、かうしては如何です。……こよひのうちに、そつと、陣所を拂つて』

『抜け駈か』

『すつと上流へ行けば、淺瀬があります。迂回して、平家方の後にひそみ、お味方が一齊に、河を渡りかゝるや否、同時に、平家の陣中へ突き入るのです。——さすれば、何人よりも負れる氣づかひはありません』

『よく氣づいた。よしつ——すぐに立たう』

武田兄弟は、走り歸ると、遽に兵をまとめ、駒に枚を銜ませて、味方にも氣づかれぬやうに、富士川の眞夜半を、肅々と岸に沿つて上流へ移動しはじめた。

すると、すでに一群の騎馬が、河を渡つて、彼方の岸へ、忍び忍び上つてゆくのが見える。すばやいやつ、そも何者かと追ひついてみると、それはやはり同郷逸見冠者光長、安田三郎義定などの味方だった。

『待たれよ』

と、太郎義信は、安田三郎へ聲をかけた。

『抜け駈の又抜け駈は、同士討に似る。逸り合つては事を破らう。われも甲斐源氏なり同流た』



ちも甲斐源氏の一黨。ひとり／＼の手功を捨てゝも、甲斐源氏の名に於いて名譽をあげたら、それで本望ではないか』

と、云つた。

義定、光長も、

『元よりの事』

と、武田勢に合體した。——陣所が近かつたので逸早く太郎義信たちの行動を知つて、彼等も、置き捨てられじと、先へ急いで来たものだった。

夜半も過ぎたらう。渡りきつた千餘騎は、猶さら行軍をひそかにして、平家の陣のうしろへ迂回つた。低い雨雲にも、ふかい夜霧にも、篝火が赤く映えてゐた。その邊りいちめんが、平家五萬餘騎の夢をつゝんでゐる陣地とながめられた。

大きな沼にさしかゝつた。北方にこの富士沼があるため、平家方では、上流の守りを安心しきつてゐたのである。もちろん武田太郎義信たちは、葭や芦を踏んで越えられさうな濕地を探つて、ざは／＼とそこをも渡りかけた。

すると、何千羽とも知れない水禽が、いちどに翼を搏つて飛び立つた。面々の駒は愕いて、幾頭かは沼水の深いところへ跳ねこんだ。

『すは、敵の大軍が』

と、あわてたのか、その時、平家の陣所の方で、海嘯に追はれた人間の悲鳴を思はずやうな喊の聲があがつた。

どんな事が世上に起つても、驚くことを忘れてゐた平家の人々は氣も萎へ、腰もぬかすほど、今、一齊に驚きを知つた。

四

頼朝は、侍臣に、呼び起された。

『何事が起つたやら分りませぬが、平家勢が、遽になだれ合つて、逃げ行く様子でござりますか？……』

夜明け前に、渡河を執行する豫定なので、彼は、鎧も解かず、身を横たへてゐただけだった。

「なに。敵が遽にひきあげて行くぞ？」

いぶかしげに、外へ出て見ると千葉介常胤も、上總介廣常も、北條父子も、みな幕を拂つて、闇の中に佇んでゐた。

「さては誰か、軍令を犯して、先駆した味方があるとみゆる。ともあれ、すでに合戦となつたからには、猶豫すな」

頼朝は、全軍へ向つて、進撃の令を下した。

「誰だ、味方を出しぬいて、先へ渡つた者は」

憤激した人々は、争ひあつて、駒の群を富士川の流れに馳け入つた。

しぶきの列を破つて、洲へ躍りあがる。又、流れへ突き入つて、眞つ白なしぶきを浴び合ふ。

本流へかゝると、元より駒の脚も届かなかつた。

一團、又一團。馬は黒々と、先を鞭つて、白波を揉みながら泳ぎ渡つてゆく。

「ふしぎだぞ！」

流れの中で、武者たちは、話してゐた。

「一筋の防ぎ矢だに來ない」

「彼方の岸邊にも、敵の影が見えぬのは何故か」

「張合もない事だ」

然し、それだからとて、他の戦友におくれていゝとは誰も思つてゐないらしい。一騎が先へ出れば、すぐ一騎が追ひ抜く。又他の二、三騎がその先を取る。餘りに急いで、鞍から身を浮かし。激流に攫はれかける者もある。すると、すぐ、誰かゞ弓か長刀の柄をさしのべて、

「つかまれ〜」

と、扶け合ふ。

二、三百騎は、いちどに水を切つて上陸つた。誰が先、誰が後とも見えなかつた。忽ち、千騎、二千騎、猶も後からひきもきらず平家の陣地へ駆けこんだ。

「おうーいつ」

と、呼べば、

「おゝういつ」

と答へてくる。どこを馳けてゐる者も味方ばかりだった。平家の旗や幕はあるが、敵らしい者には誰も出會はなかつた。

「何で、かくも素早く、あれだけの大軍が逃げ去つたのか」

源氏方には、たゞ不思議でならなかつた。そのうちに、

「居たわ、居たわ！」

と、味方の若い一組が、大聲で騒いでゐた。何が居たかと、駆け集まつてみると、平家方の大將の陣所らしい幕舎の隅に、一かたまりの妓の群が、をのゝき縮まつて、地に伏したり、幕にかくれたり、抱き合つたりして——中でも稚い十二、三の妓は、シクシク泣いてゐた。

「なんだ、敵ではないのか」

「この近くの宿驛から狩りあつて來た傾城どもだ。……いや、民家の娘らしい女子もみえる」

「あきれたものだ。——陣中へ」

「こゝばかりでない。どこの陣所にも残つてゐるのは女ばかり。——都そだちの平家人は、女子にまで、かくも無情よ。日頃の輕薄は、あたりまへであつた」

「あはゝゝゝ」

「わはゝゝ」

遊女たちの話して、平家方の大將たちが先になつて、水禽の羽音と共に逃げ出したといふ始末がわかつた。

又、大地を見まはせば、種々な食器やら、樂器やら、化粧道具の類まで、およそ贅澤な日常用品で落ちてゐない物はないほどであつた。

兄と弟

一

その日、黄瀬川の宿驛には、何萬といふ兵馬が屯した。もちろん宿中にそんな人員が泊りきれぬわけではない。頼朝の宿舎を中心として、畑にも野にも河原にも、それぞれ陣を分つてゐる

たのである。

富士川の歸りであつた。

一戦も交へずに、京へさして敗退した平維盛、忠度などを追撃して、

『このまゝ攻上らう！』

とは、その折の當然な頼朝の意氣ぐみであつたが、

『いや、こゝが大事でせう。まだ東國は源氏一色となつたわけではありません。まづ、一應お味方も鎌倉へ退いて、徐ろに、地盤を固める必要がある』

と、説いたのは、さすがに東國の事情に精通してゐる廣常や常胤などの老功であつた。

『……さうか』

頼朝は、自身へ考慮の間を與へて、口をつぐんだ。

彼は老人の言にはいつも一應の考慮は拂ふ。常に、老人の意志など無視して若い意力のまゝ前進してゐるかのやうであるが、

——これは。

と、耳にとめた事は、老人の意見とて、決して聞き流してはゐなかつた。

鎌倉に。

といふ着想も、常胤の云ひ出した事であつたし、今、富士川から退軍するのが利だといふ説も、その常胤と廣常の諫めであつた。

だが、いくら東國の事情に詳しい二人の説でも、鶴のみに、さうかと信じないところも、頼朝の性質だつた。

『なぜ、退くのがいゝか』

さう質問した。

廣常は、それに答へて、

『——されば。常陸の志太義廣とか、佐竹一族とか下野の足利忠綱など、まだ平家に屬する豪族は、五指を折るも足らぬほどある上に……です』

と、そればかりではない理由を——味方の弱點を廣常は指摘した。

要するに、いかに士氣は昂くとも、強靱な軍勢でも、内部の組織は、一夜仕立てである。縦

糸は太いが、横糸は極めて粗い。

平家は一見、その組織も士氣も早、末期のものとは見えるが——と云つて、一舉になど見
縊つたら、存外な惨敗を喫するかもしれない。勘くも彼には数十年の集積がある。又、頼朝以
上の逆境から立つて——今日の平家を築きあげた入道相國がなほ健在である。

『うむ。さうか』

頼朝は、釋然として、すぐ總軍にひき揚を令した。——そして今日、黄瀬川に駐屯して、明
日は足柄をこえ、鎌倉へと歸つて行く途中であつた。

彼の宿舎は、土地の舊家であつた。鄙びた民屋だが、その門は頑丈であつた。日頃から土
賊の來襲へ備へが出来てゐるのである。

『止るなつ。旅人』

『——通れつ。御門前で、駒を止めてはならぬ。馬の腹帯など、彼方へ行つて直せ』
門を守り固めてゐる番の武士が往來へ向つてどなつた。——その往來の人影は、夕闇を織つ
て一通りな混雑ではない。

その中に。

今、馬の背から降りて、何やらまごついてゐる主従七、八名の者がある。番の武士にどなら
れると、二十歳ばかりの小づくりな冠者が、

『はいつ』

と、振向いて、番の武士たちへニコと微笑をもつて答へた。そして、乗つて來た駒を路傍へ
片寄せよと供の者にいひつけ、二人の郎黨を従れて、門の正面へ、眞つ直に歩み出して來た。

二

二十歳ばかりのその冠者は、旅垢にまみれた狩衣の下に、具足を着こんでゐた。背は五尺一、
二寸ぐらゐるしかあるまい。肩幅もきやしゃであるし、總じて小がらな若者だつた。

でも。どこか凛として。

左の手を、太刀のあたりに、右の手を握つて提げ、づかくと、胸を正して門へかゝつて來
たので、警固の武者たちは、

兄と弟

「はて。何者か」

と、眼をこらしてゐると、

「鎌倉殿のお陣屋はこゝでござるか」

と、問ふ。

武者たちは、聲をそろへて、

「いかにも」

領きを與へながらも、眼は、油断なく、冠者のうへに注いでゐると、

「——お取次ぎを賜はれ。遙々、奥州より馳け下つて参つた弟の九郎です。兄頼朝へ、九郎が参つたと、お傳へ下されませ」

「……なに？」

皆耳を疑つた。

聞きちがひではないかといふやうな顔つきを示した。

冠者の語首には、なる程、奥州らしい訛りがあつた。しかし、それも聞きづらい程ではない。

たゞ、冠者のことばが、餘りに感情に満ちてゐて、平靜でないので、役目上、番の武者たちは、すぐ危険視したのであつた。

——それと又。

兄頼朝と云つたのが解せなかつた。九郎などといふ弟御のある事など、話のはしにも聞いたことがない。武者たちは、よけい不審な眼をかゞやかした。

「おねがひ致しまする」

九郎義経は、ことばを重ねたのみならず、武者たちの眼いろを察して、ていねいにその頭を下げて直して、

「不審な者ではありません。年久しく鞍馬にあり、その後、奥州にかくれて、生ひ育つた九郎義経です。——と、お傳へたまはれば、兄頼朝は御存知のはずです。過ぐる頃、伊豆の御配所より、旗上げの御状をひそかにいたゞいてをり、懸命、四圍の妨げを突き破つて、夜を日についで、これ迄馳けつけて來たのでござる。……一刻もはやく、兄君のお顔を拜したいのです。……どうか、おはやく、この由を」

義経には冷静に云ひつゞけられなかつた。ともすれば、この門前で、もう涙が先立ちさうでならなかつた。彼の胸には鞍馬以来の——いやそれよりもずっと前の——雪のふる日までが胸を往來してゐた。その雪の日や平治の戦亂は、記憶にあるはずもなかつたが、幼な心に聞いてゐるたくさ／＼の事が、後には皆、幼少の體驗をそのまま記憶してゐるやうに、今でも胸に廻へつて來るのであつた。

『ならぬッ』

番の武者は、水でも浴びせるやうに、いきなり叱つた。

『鎌倉殿に對して、兄の弟のと、馴々しいことば遣ひ、聞き捨てにならぬ無禮であるが、多分、人違ひであらう。さもなくば狂人か』

と、義経のうしろに立つてゐる二名の郎黨へ向つて、

『これは、其方どもの主人か。はや召連れて、御門前を退け。ぐづぐづいたしをると、用捨せぬ』

『あいや！』

ふたりの郎黨は、義経の前へ出て、更に大聲で何か云はうとした。——その骨柄や眼ざしが、一くせ有る者と思へたので、番の武者たちは、氣押されて、

『狼藉いたすかつ』

と、威壓した。

『いや、狼藉はしません！』

騒然と、ふた言三言、それから双方で烈しく云ひ争つてゐた。——折ふし、門のうちを通りかけた土肥二郎實平は、何事かと、外へ出て來てみると、この體なので、

『鎮れ。鎮らぬか』

と、引わけて、偕、一方に毅然として竹んでゐる小がらな冠者に眼をとめた。

『おん身は、誰か』

と、彼も不審さうな顔して、その前へ寄つた。

土肥二郎實平は背が高い。

小づくりな義経は、上から見下ろされた姿であつた。

「……」

義経は、答へる代りに、眼を以て、自分より高いところに在る彼の眼を見つめてゐた。

實平は、もう一遍、同じことを訊ねた。

「鎌倉殿へお目通りしたいといふ事だが、あなた一體、どこの何者だ」

すると、義経は、

「さういふお前は？」

と、訊ね返した。

番の武者には、至極でいねいで腰低かつたが、實平に對してから彼の態度はまるでちがつてゐた。

たゞみかけて、

「兄の家臣であらうが、姓は何といふ？」 人の氏素姓を糺しながらわが名も告げないのは、禮儀に缺けてゐるではないか」

と、咎めた。

實平は、異様な氣もちに襲はれた。見も知らない若い小男から、こんな横柄に臨まれたのは初めてだつた。けれど、不思議にも冷笑できない威壓をうけた。——兄の家臣。さう頭から云はれた一言に、何か、抑へられてしまつた氣持なのである。

「申し遅れました」

實平は、思はず頭を下げ、改めて姓名を告げたが、その上で、更に厳しく、

「して、貴君は」

と、問ひつめた。

かりそめにも疑はしいふしがあつたら免さぬぞといふ眼ざしが、こんどは明らかに、實平の眸から燃えてゐた。

「僕は亡き義朝が末子、幼名を牛若といひ、兄頼朝とは平治の亂にわかれ、鞍馬に育ち、奥州の秀衡が許にて人となり、今、源九郎義経と名のる者。——時來つて、兄上の旗擧げと聞き、

夜を日についで馳せ下つて来たのです。……常盤が腹の末の義弟牛若と披露あれば、必ず兄上にも思ひ出して下さるであらう』

と、義経は、篤と相手の胸に落ちるやう、一語々々に、心を勞つて述べた。

『よく分りました』

實平は、前よりも低く頭を下げてから、暫くお待ち——と云ひ残して門のうちへかくれた。ちやうどその時頼朝は、奥の間で、夕餉の膳にむかつてゐた。この家の長者の娘が盛装して給仕に侍つてゐるのが目についた。北條、千葉、その他の群臣が、居ながれて皆、杯を手にしてゐた。

『お食事中ではありませんが、ちよつとお耳まで』

實平は、席のすそへ坐つて、かう取次いだ。後は、自分で取次ぎに出た事柄に、自分でもまだ慥と信が持てない容子であつた。

『なに九郎が。……あの奥州の九郎が訪ねて見えたとか』

頼朝は、口のうちに咄くやうに云ひながら、茫然と、その眼は、二十年前の思ひ出をあわただしく心の奥で索つてゐた。

『……はい』

實平は、遠くから、その氣色を窺つてゐた。並居る人々も、思ひがけない事をふと耳にして、一様に、頼朝の面を見まもつてゐた。

『……オ、』

頼朝は、聲と共に、ハタと膝へ手を落して、

『さては、正しく血縁の義弟、九郎義経にちがひあるまい。——なつかしや、すぐ通せ。すぐこれへ』

と、聲彈ませて云つた。

土肥實平は、はつと起つと、顔いろを變へて退がつた。——さては、やはり骨肉の弟君であつたのかと、うろたへと、緊張とに、聲音も大きく、馳けて行つた。

『一同は暫くこゝを退がつてをれ。——さうだ、別間へ宴を移して、寛ぐがよい』

頼朝は、左右の人々へ、さう告げて、膳も酒器も、片づけさせた。

一穗の灯火のほか、そこには何も無くなつた。清浄な灯かけだけが靜かにゆらいでゐた。

——さうした氣持で、彼は、二十年ぶりの、いや、生れて初めて會ふ骨肉を迎へたかつた。

やがて、廣縁の外で、

『どうぞ、此方へ』

と、案内に立つ實平の聲がきこえた。つゞいて、靜に、縁を踏んでくる登音がする。——その氣配にさへ、頼朝は、あやしく胸が顫へて來た。

どんな弟であらうか。

會つて、まづ、何といはうか。

ふしぎな血がしきりと胸に鼓動してくる。この音こそ、争へない血しほのつながりを證據だてるものではあるまいか。けふまでの二十年間、胸をさびしく閉してゐた孤獨の扉を、ふいに叩かれた驚きと歡びには、幾分の狼狽さへ交じつてゐた。

『兄君でございませうか』

——と、見ればその義經は、實平に誘はれた、燭から遠い下座に着いて、ひたと、自分の方へ向つてひれ伏してゐた。

『……』

頼朝は、義經の云つた最初のことばを、よく聞き取つてゐなかつた。

義經の聲も、をのゝいて、情の昂ぶりのみが、ことばの上に覆れてゐたし、頼朝の耳も、徒に熱してゐた。

『お會ひ申すのは、今初めてでござりますが、物心つき初めてから、人と成るまで、一日だに、世に、一人の兄上ありと、伊豆の空を憶はぬ日とはありませんでした。——兄上にも、お心の隅に、奥州に九郎といふ一人の弟ありと、他ながらもお覚えでござりませう。その弟義經にござりまする。源九郎義經にござりまする！……』

『覚えてゐる』

頼朝は、云ふと、われを忘れて、手をあげた。

兄と弟

「なぜ、そのやうに、遠くにをるぞ。他人のやうに隔てゝをるか。——もそつと、間近う寄つて、面を見せよ」

義経は、なほ遠慮して、側にゐる實平の顔をそつと窺つた。實平は、その意を酌んで、「おことばですから、ずつとお近くへ行つて、御悠りと、お物語りなされませ。——實平は、次に退がつてをります故、御用の時は、お呼びくださいますよう」

と、小聲で云つた。
義経は、一人となると、猶、生れて初めて會つた兄に對して、處女のやうな羞恥ひと、遠慮を抱いた。

五

——よい骨柄の若者。これが、自分の義弟だつたか。

頼朝は、眼をほそめた。
自分も席をすゝませた。義経もすり寄つて出た。

「おなつかしう御座いました」

相寄ると、そこには、もう身分の隔ても権力の相違もなかつた。家臣や儀禮の形式もなかつた。おたがひが親なき子であつた。又、逆境から芽生えて、ふしぎにもこゝ迄、無事に成人して來たと思ふばかりな——運命の子と運命の子であつた。

「よくぞ、訪ねて參られた」

頼朝は、手をさしのべて、義経の手をつかんだ。義経は、欣しさに、願いてゐた。

この温み。

この骨肉の手。

それは、生れて初めて知つたものである。母こそちがへ、血は正しくひとつの父からうけてゐる。

「夢にまで。——夢にまで。……幾たび兄君のことを夢みたか知れませぬ。……會ひたうござりました」

「わしとでも」

兄と弟

頼朝は、はふり落つる涙を、拭ひもせず、義經の背をかゝへた。

「風のたよりに、遠いうはさに、そちの消息を聞く折々、いつ會ふ日があらうか、何んな健氣に成人して居るやらと——」

「同じやうに、私も、年十六の頃、鞍馬をのがれて、奥州へ落ちて行く途中……ついその足柄山を越えながら……すぐ眼のさきに見える伊豆の海を、配所のあたりを、どんなに、戀しく思ひながら、振り向き振り向きして通つた事か知れませんでした」

義經の聲も、甘い嗚咽と、うれし涙と、遠い追憶に、途切れ／＼であつた。

「——又この度も、兄君のお旗上げと傳へ聞くなり、矢も楯もなく馳せ参らんものと、秀衡殿に計りましたが、秀衡殿には、まだ時が早からう、今しばし形勢を見よとばかりで、どうしてもお許し下さらぬため、馬一匹に、共の者四、五名連れたのみで、密かに、平泉を脱け、途中まで急いで来ると——秀衡殿にも、それ迄の決心なればと、佐藤繼信、忠信のふたりを、後より追ひかけさせて、私の郎黨にと、付き添へてくれました」

義經は、さう綿々と話しかけたが、前後のつながりも缺いて、餘りに欣しまぎれになつてゐる

自分の話し方に氣づいて、

「つい、取亂しました。女々しい弟よと、お笑ひくださいますな」

と涙をふいて、少し身を退けながら、禮を保つた。

頼朝も、茫然たるこゝちから自分に返つて、

「こよひは、悠りと、語り明かしてもよいが、何せい陣中、いづれ鎌倉へ歸つてから、落着いて話すとしよう。——そちも定めし疲れてをらう。こよひは旅の垢でもそゝいで寝んだがよからう」

「はい」

素直な弟の返辭までが、頼朝には、又なく欣しく見えた。これからの家庭に、ひとりの賑はひと、一族のうちに、大きな力を加へた氣が直ぐにしてゐた。

「實平、實平」

呼ぶと、次の間で、

「はつ」

答へがした。そして最前の土肥二郎のすがたが、縁の端にうづくまつて見えた。
『弟を、どこぞ一室へ案内してつかはせ。——そして、何かと鎌倉までは、面倒を見てやつてくれい』

『畏まりました』

實平も、次の間で、貰ひ泣きしてゐたとみえて、すこし喉が腫れてゐた。——その眼で義經を招きながら、無言のまゝ、紙燭をかゝけて先に立つて行つた。

六

鎌倉の秋は色濃くなつてゐた。

頼朝は、師をかへし、十月二十三日に、鎌倉へ歸つた。

こんどの富士川は——戦はざる凱旋であつた。

が、石橋山以來の論功行賞が初めて發表された。

北條時政父子。

何といつても、功勞では、この人の筆頭であることに、誰も異存はなかつた。

次いで、

千葉介常胤、武田一族。

和田、三浦、土肥などの人々。

佐々木定綱、經高、益綱、高綱。

などの兄弟や、同じやうに、配所に長年仕へてきた天野遠景、加藤次景廉など、ほとんど洩れなく、新しく領地をうけ、或は本領安堵、その他の恩賞にあづかつた。

四日惜いて、その月の二十七日には、ふたゝび常陸へ軍をすゝめた。

常陸の佐竹一族を討ちに。

この方面は、地理情勢の明るい上野介廣常がもつばら先鋒に立つて奮戦した。

十二月常陸平定の業は終つた。

師走の十二日。

風のない冬日和だつた。

頼朝はその日、大倉郷の新邸へ移轉した。富士川へ出陣のまへに手斧初めをあげたあの館がもう落成してゐたのである。

その移轉の式の日、頼朝のいでたちは水干に騎馬で、前後左右、おびたゞしい武者を従へ、新館の寢殿（正殿）にはいると、美しき御臺所とならんで、出仕の武士三百餘人に、調を與へた。

政子は、終始、良人と共に、交々祝ひをのべる武士に、ほんのわづか、黙禮を施してゐるだけであつた。

『きついお性質らしい』

と、初めて謁した老将たちは、その態度に、そつと嘯きあつた。

館は、頼朝夫妻の館ばかりではなく、その政廳、侍所などを中心に、大路小路の邸町も建ち並んだのである。——どこは誰それの館の辻、どこは某の谷と、そのまゝ地名として、その日から呼び慣はされた。

三日にわたつて、祝ひが擧げられた。宛として、祭日のやうであつた。たくさんに酒をのむ

事もゆるされた。

その間にも、庶民に對して、次々と法令が出、又、武士たちに對しては、特に嚴かに「武士たるの道」と「吏道」を遵奉すべき令が發せられた。

『お忙しくはあらせられませうが、九郎様にも、折を見てお目通りを賜はりますやうに。……黄瀬川の夜以來、御曹子にも、悠りとおはなしの折を、毎日、待ちこがれて居られますやうで』

頼朝の左右のすきを見て土肥二郎は、義經に代つて、かう願ひ出た。

義經はその後、九郎御曹子と稱ばれて、家族の一員となり、又、幕將の端に隨身して、明け暮れ、兄の側近くゐるやうではあつたが、あれ以來、兄とも弟とも、親しく呼び交したこともなかつた。むしろ政治や戰略上のことで近づく將たちの方が、彼よりはよほど頼朝と近かつた。

で、それとなく、土肥二郎に、頼んでおいたのであらう。實平が今、よい折と見て、頼朝に告げると、

『さうさう。尤郎にはまだ鎌倉へ来てから落着いて會ふ折もなかつたの。政子にも、ひき會はせておかねばなるまい。これへ呼べ』
と、早速、ゆるした。

義経は、召されて、程なく兄と嫂の前へ来た。——然し、黄瀬川の夜とはちがつて、

『九郎か。その後は侍勤めにも馴れたか。奥州とは事ちがひ、坂東武者はみな氣があらひ。豪毅勇壯で目ざましからうが。——そちも人々に負れをとるなよ』

と、あつさりして、妻の政子に向つては、

『これが、いづぞや其女にもはなした九郎ぢや。目をかけてやれよ』

とのみ云つて、義経がひそかに胸に湛へてゐた骨肉らしい親しみや、嫂らしいことばには甘えることができなかった。

乳母の子

すると又、實平がそれへ来て頼朝の方へ手をつかへながら訊ねた。

『瀧口の老母へすでお目通りの儀を、おゆるしなされましたか。……唯今、訪れて見えましたが』

『お。囚人經俊の母か。……會うてやると云つて。庭へ通せ』

頼朝は、目の前にゐる義経よりも、むしろその方へ遽に心を惹かれたふうであつた。

實平が退がると、彼も立つて、席を更へ、庭へ曳かれて來る者を待ちかまへた。それを機に政子は奥へ入つてしまふし、手持ち不沙汰になつた義経は、兄の傍らに坐つて、侍臣のごとく控へてゐた。

『……おう、佐殿』

よろめくやうに庭先へ来て、へたと坐りくづれた老母があつた。それは頼朝が幼い頃の乳母であつた。

然し、頼朝はなつかしさうな顔も見せず、かへつて、はたと厳しい眼をして、老母が昔のごとく自分へ馴々しくものを云ふのを防ぐかのやうな威厳を示した。

「……あ、あ」

その容子に、とりつく島もなくなつて、老母は階下に泣き伏した。

老母の子は、瀧口三郎経俊といつて、山内ノ庄を領してゐたが、頼朝が旗上げの際に、藤九郎盛長を使として招いたところ、経俊は一笑に附して、拒絶したばかりでなく、さんぐに悪口をついたあげく、平家の大庭景親に加勢して、飽まで頼朝に楯ついて来た者であつた。

ところが。

その景親は、石橋山の合戦では、大いに意氣を上げてゐたが、その後、頼朝の捲土重来に遭つて、諸所に敗れ、果は、身の置き場もなくなつた爲、たうとう先頃わづかの部下をつれて降参して出た。

景親をはじめ、降人共は、それぞれ諸將の手に分けて預けられたが、その中に、瀧口三郎も交じつてゐたのであつた。

彼の所領は取上げとなり、身がらは土肥二郎の邸へ預けられてゐた。そして評議の末、近いうちに斬罪と極つてゐた者であるが——その母は、曾ての頼朝の乳母で縁故があるので、

「どうぞ、彼子が先祖の功にめんじて、このたびの不心得は、お助けおき下さるやうに」

と、子の可愛さに、これへ嘆願に出たものであつた。

——が、彼女はこゝへ來ると、泣いてばかりゐてそれも云へなかつた。しかし、嘆願の事はいくたびも頼朝に通じてあつたし、傷々しい姿を見、泣きじやくる聲を聞いただけでも、十分、老母の心は、頼朝には分つてゐた。

「……」

然るに頼朝は冷然と見てゐただけで、何を問うてやらうともしない。——側にゐた義経は、居るにも堪へないこゝちがして、何とか兄に取なしてやりたい程に思つたが、頼朝の面には、むしろ何か心地よげな苦笑すらあるのではないかと疑はれるほど無情を誇示してゐた。

「……遠い、遠いことではございますが、瀧口家の祖は、八幡様(義家)にも、延慰禪室様(爲義)にも、人なみの忠勤は勵んだものでございます。——彼子が、このたび、大庭景親に徒

黨して、殿へ、抵抗ひいたしたのは、まつたく、一時の魔がさしたのでござりまする。……ほん気な仕業とは、彼子を生んだこの母にも信じられませぬ。……どうぞ、お慈悲に——お情に助けて賜はりませ。こゝこの通りでござりまする』

老母は、懸命に、涙と闘ひながらしやべり出した。——その聲は、上はずったり、かすれたり、顫へたり、人の子の母でなければさけび得ない眞實のものであつた。

『實平』

頼朝は眼を反らして、老母の横にうづくまつてゐる彼へ、至極、平靜なことばで吩咐けた。

『いつぞや、そちの手許へ預けおいた鎧があつたな。あの鎧を、これへ持つて参れ。……いや、石橋山でわしが着て戦つたあの破れ鎧のことよ。早う持参せい』

二

やがて、實平がもどると、一領の鎧が、彼女の前に、どさりと置かれた。

『瀧口の老母』

頼朝は、さう呼び直して、改まつた調子で云つた。

『それは石橋山の合戦に、この頼朝が身につけてゐた物ぢやが、後日の證據にと、残しておいた。——と云ふわけは、その鎧の袖を縫うてゐる箭を見るがよい。たしかに、そちの倅、瀧口經俊が射た箭であるまいか』

老母はぎくとしたやうに、顔蒼ざめてをのゝいた。

『見よ』

『……』

『手にとつて見よ』

頼朝のことばこそ、箭のやうに鋭かつた。

『——鍔だけは取りのけて置いたなれど、箭の口巻を検めて見るがよい。何としろしてある。瀧口三郎藤原經俊と——明らかに讀まれるであらうが』

『……』

老母は、鎧のうへに、泣き伏してしまつた。

乳母の子

後日の證據に——

と云つた頼朝の意中を窺へば、もういかにわが子の助命をすがつても、云ひわけをしてもむだと思ひつめたのであらう。痩せ細つた頸のあたりの白髪が、鎧にしがみついたまゝ、たゞいつ迄も泣きふるへるのみだつた。

見るに忍びなくなつたのであらう。實平はいつの間にか庭にゐなかつた。さつきから兄の側にじつと控へてゐた義経も、許されるものなら座を立つてしまひたかつた。

老母はまだよゝと泣きじやくつてゐる。起てないのもむりはない——義経は面をそむけながら思ひ遣つた。

いつのまにか義経の胸は、兄に對する嫌厭でいつぱいになつてゐた。黄瀬川の宿で初めて會つた時とは正反對な兄を見るこゝちがした。

兄と思ふべきではない。鎌倉殿のなさる人事の處置に對して、そんな心を抱いてはならないと思つてみても、どうしやうもない嫌厭だつた。

骨肉である以上、血はひとつである。兄の血は自分にもある血にちがひない。義経は自分を

憎むと同じやうに兄のさうした冷酷な裁きを憎惡せずにもられなかつた。

「……申しわけも……申しわけもござりませぬ」

やゝあつて——である。

經俊の母は、脱穀のやうになつて力なく立つた。そして両手で面を蔽つたまゝすごくと退がりかけた。

十歩。十五歩。

地も見ずに、老母は中門のはうへ、しよぼくと歩きかけた。——義経は、もうそれを、そのまゝ見送れなくなつた。老母に代つて、助命をとりなしてやらうといふ氣が、胸をつきあげたが、ベタと、両手をつかへて、何か兄へ向つて云はうとした。

その容子を、頼朝は、じろと冷たい眼で見ながら、義経へは何も問はずに、

「乳母。待て」

と、呼びとめた。

乳母——と初めてその時呼んだのである。そして、豫じめ肚の中では、最初からさういふつ

もりであつたかのやうに、

『こらへられぬ所ではあるが、先祖の功に免じて、この度だけは、経俊の命、助けおいてと
らせる。……倅めに、そなたからもよくよく云ひ聞かせておくがよからうぞ』

と、云つた。

腰がぬけたやうに、老母は、大地に平たくなつて、座を立つ朝頼のすがたを拜んでゐた。義
経も手をついたまゝでゐた。しかし義経の感情はなほ感情のまゝ胸のすみに澱んでゐた。

新府繁昌記

その年の鎌倉は、石叟き謡や手斧の音に暮れ、初春も手斧のひゞきや石工の謡から明け初め
た。——鎌倉へ、鎌倉へ。

この相言葉は、もう軍の用語から轉じて、民間のものになつてゐた。

『鎌倉へ行けば仕事がある』

東國から北のはうまで、國々の往來で、旅の者が、旅の者に、

『何處へ？』

と行く先をたづねれば、

『鎌倉へ』

と、極つていふ。

妻子を連れたり、弟子たちを従へたり、道具を擔つたりした鍛冶、漆工、指物師、大工、屋
根葺、機織女、彫刻師、染工などから、馬の群を曳いた牧の者、僧の群をつれた寺院の徒、女
の群をつれてゆく何商賣か知れない人間たちまでが——相模の新府をさしてみな將來の生計を
植ゑつけるべく流れて行く。

『ふしぎな現象だ』

或る者は、懷疑した。

理由が見出せないからである。

なる程、鎌倉では目下、さかんに土木を起してゐる。夥しい鎌倉殿の御家人が各々居館を新築し、それに附随してゐる將士もみな、集團的に住居を建て始めてゐるから、その景氣のよさはすさまじからうとは誰にでも想像がつく。

けれど、よく考へてみれば、危い事にも思はれる。なぜならば、天下はまだ嚴然として平家のものである。

東國から常陸、信濃あたりまでは、ともかく頼朝の武力になびいたが、奥州の藤原秀衡は、まだ源氏に與すとは宣言してゐない。

まして、相模から西はまた、全面的の平家色である。東國を失つても、京より西にはなほ中國、九州があり四國や伊勢方面の地盤もある。

總じて、平家の富力と勢力とは根を東國には置いてない。西國こそ平相國が多年にわたつて扶植してきた地盤である。

——かう観る者は、

「鎌倉々々と、みな浮いてゆくが、鎌倉殿の力はまだ知れぬ。うつかり移住して、又ぞろ兵火に焼き立られて、路頭に迷ふよりは動かぬがましぢやらう」

と、危ふげな眼で、傍觀してゐた。

それは多く、庶民のうちでも、智性に優れた人々だつた。知識に照らしては、割きれない現象だからである。

割りきれないといへば、第一、半年やそこらで、地方的な合戦には勝つたところで、鎌倉殿のふところに、さう財力があるわけがない。——京都へでも攻め上つて、然るべく、中樞の政權でも取つたうへなら知らない事だがと、説をなす者もある。

知識類したそれ等の人々のいふ事はいらく尤もで道理が立つてゐるが——にも關はず民衆の足は、夜が明けても、夜が明けても、鎌倉へ鎌倉へと向いて行つた。一日ましに殖えていつた。

それと又。

鎌倉へ住んだが最後、彼等は各々の職につくなりむやみに元氣に働いた。こゝへ來て鬱陶し

二七六
顔をしてゐる人間はなかつた。こゝの地上に遊んでゐる人間はなかつた。馬も牛も——犬までが働いてゐるやうに見えた。

なぜだらう？

そんな事を考へてゐる閑人はこゝにはないが、とにかく働かずにゐられないのだ。働くことが愉快にされるのだ。どこの國府よりは明るいのである。——そして、

『これからさ！』

『世の中はこれだよ！』

みな云ふのである。

要するに、人間は建設を好むからである。建設を終つて腐蝕期に入つてゐる平家の地盤で、不安なあくびをしてゐるよりは、粗食と汗と土まみれの中に居ようと、これからだと云ひ合へる天地に生きたいのである。

だが、さう一つに、人心をひつばつてゐる力は鎌倉そのものではない。やはり人である。しかも一人の人であつた。

二

その頃、鎌倉への聞えに對し、嚴秘にされてゐたが、平家方の内部には、致命的な憂ひが起つてゐた。

太政入道の重い病である。

『近ごろ貴顯方の馬、車の往き交ひが、何だか、たゞ事ではないが！』

とは、京都の庶民たちも、うすうす變には感じてゐたが、凡事でない騒ぎは、去年から年の暮までもつゞいてゐた——

『又、何かあるんだらう』

鎌倉の民衆とちがつて、こゝでは庶民と上流の層とが、完全にかけて離れてゐた。「驚き忘れた一門」の無反省が反映して、庶民たちも何が起らうと、驚かない習性に墮してゐた。

東國には頼朝が。木曾方面からは義仲が。

九州では肥後の菊池。豊後、肥前なども源氏に呼應して太宰府へ攻めかけたといふ。

——四國の伊豫にも、吉野、奈良にも、近江にも畿内にも、騒亂が起つた。みな平家に反いて起つた。

等、等、等——、今にも天地が覆へるやうにいふ者もあるが、多くは平然。

「ホウ。又ですか」

上層の驚かないのと、彼等の驚かないのとは、質はちがふが、いづれにしても、京都のもつてゐる爛熱、懶惰、輕佻の空氣はすこしも革まらない。

然し。さうした中でも、去年の暮、南都の大衆に、不穩のきざし有りとかで、清盛入道は、重衡朝臣をして三萬餘騎をさしむけ、また、くまに奈良の東大寺、興福寺をはじめ、伽藍堂塔を焼きはらひ、大乘小乗の聖教やら、國內第一の大佛秘佛など悉く灰燼にしたばかりか、手抗ふ僧兵一萬餘を斬り殺し焼き殺したといふ——

あの事件の時ばかりは、さすがに心なき人々までも、

「南無——」

と、思はず唱へて、その數日は、朝夕の飯も不味い思ひがするなどと語り合つてゐたことだつた。

その生々しい記憶のある矢さきなので、明けて今年、養和元年の閏二月、

「入道には、もはや今日か明日のお命ちやさうな」

と、誰からともなく、清盛の危篤がもれ傳はると、みな一圖に、

「それ見たか。佛罰はおそろしい」

と、すべてをその罪業のむくいとして、ある事かない事かの判断もなく、入道の病について、忽ち、奇々怪々な浮説が云ひ囃された。

深く秘せられてゐる入道の容體が、さう下々にすぐ分るはずもないのに、大熱に苦しむ呻く入道の聲が侍所まで聞えるとか、百人の夫人に千手院の冷水をくませて石の船に堪へては冷やしてゐるが、水は忽ち湯となつて沸りたつてしまふとか、ゆうべも、八葉の車を曳いた閻王の使が、焰をあげて夜空から翔け下り、

(われは、閻王奪魂の使なり。一門の弓矢も、金銀珠玉も、冥途無常の迎へには塵ぞかし。疾

う疾う立ち候へ。」

と、云ふのが大殿の棟に燃えつかんばかり聞えたが、二位殿の看護の真心や、加持祈禱の衆僧が、諸聲あはせて唱ふる誦經に、やがて夜明けと共に消え去つた——とか紛々たる取沙汰なのである。

だが、そんな噂が京中に擴がつてゐた頃には、實は、すでに清盛は死んでゐた。

二月四日の夕だつた。

遺言は、何も無い。

たゞ、臨終の日、かう云つたといふ。

『みんなをろか。……わしは悔いしない事をたゞひとつ仕残した。頼朝を助けた。おまへたちは、頼朝に亡されるなよ。わしのために、月々の供養などよしてくれ。頼朝と戦へ。それがおまへ達の再生だ。又、わしへの供養だ。……頼朝の首をわしの墓前に供へろ。……頼朝の首をだ……』

三

清盛の死は、さすがに日本中を震駭させた。

よく云ふ人々も、悪くいふ人々も、共に、大きな感慨に打たれて、

人間。

それを考へさせられた。

鎌倉の海には夏が来た。

河口には、奥州船も、京船も、西國船もついてゐた。建設まだ半年といふのに、こゝから陸

揚げされた荷は夥しいものだつた。

『早いなあ。……一船毎に見違へるばかりな繁昌だ』

滑川の河口に横づけになつてゐる奥州通ひの船に立つて、かうつぶやいてゐる男がある。

『おうい、行つてくるぞ。おれは鶴ヶ岡へ海上の祈願にだが、おまへ達は、いづれ化粧坂だら

う。悪酒をすすすなよ』

五十をこえてるよう。身なりばかりでなく、人間としてもでき上つてゐるといふ感じのする人物である。

金賣の吉次だつた。

吉次は、その日、頼朝が納涼のために、三浦義連のやしきへ招かれてゆくといふ事を聞いたので、急に、その行列を見るといふよりは——頼朝に隨身の諸將のうちに、きつと九郎義経もゐるであらうと思ひ、

「よそながら一目」

と、思ひ立つて出かけたのであつた。

稻瀬の松並木まで来て待つてゐると、毛利冠者頼隆が先に、その後から頼朝が騎馬で大勢の武者につままれて来た。——所詮、その威勢は、路傍になど佇んで見てゐられるものではなかつたから、吉次はあはて、佐賀山へ上つてしまつた。

佐賀山の下海邊道まで頼朝が来かゝると、それを出迎へに出でゐた郎從五十人ばかりは、一齊に馬を下りて、砂上に平伏した。

「御老人、御老人ッ」

突然、三浦義連が、かう誰にも聞えるやうな大声で、注意をした。

「わしの事か」

上総介廣常は、馬の上から見まはした。

すべての將士が、下馬して、砂上に平伏してゐるのに、彼のみは馬を下りずに胸も反らしてゐた。

「お年のせるか。なぜ下馬なさらん。御前でござるぞ」

義連が重ねてたしなめると、老人は、彼の叱咤にも負けない聲を出して、

「廣常、まだ年を老らねばこそ、かやうに致してをるのでござる。三浦殿とは、家風がちがひ、われ等に於ては、父子三代のあひだ、東國の武門として、まだ下馬の禮はいたした例がござらぬ。——馬上の武士は馬上のまゝ禮をいたすが、わが家に於ては、最上の禮儀でござる」

さう云つて、彼のみはたうとう馬を下りなかつた。

頼朝は、苦笑して通つた。

かういふ一徹な曲げない風は、老人ばかりでなく、彼の擁す兵ばらには皆あつた。坂東の原野と山川が人間のなかに育んだ太いすぢ骨といふものであらう。鎌倉の新府には今、その骨太い性格の持主ばかりが、何萬となくひとつに住んで、事毎に搏撃しあつてゐた。喧嘩を氣にかけてゐては、一兵卒でも、今の鎌倉には、一日も住んでゐられないほど、剛毅と剛健のよりあひなのである。

「こゝは、和殿の父、大介義明のやしきであつたか」

義連の亭にくつろぐと、頼朝は機嫌よく、酒を酌みながら、當日の主にしたづねた。

岡崎四郎義實は、ひどく酔つてゐた。酔ふて若者のやうにはしゃやく老人で、

「殿の召されてお在す水干を、義實に賜はりませ」

などと云ひ出した。

頼朝は、笑つて、

「これが欲しいか」

と、脱いで、投げ與へた。

「かたじけなうござる。どうぢや、どうぢや、身の面目は」

義實は、子どものやうに、すぐそれを着て、威張つて見せた。

四

岡崎四郎義實は、さつそく拜領の水干を、上に着こんで、

「あら冥加。——どうだ方々。どんなものだ」

と、子どものやうに、左右の袖をひろげて、吾儘のかなつた身の面目を、座中へ向つて自慢

した。

すると又、上総介廣常が、その口眞似をするやうに、

「あら勿體なや。——いかに各々。殿の水干を彼に下さるほどならば、この上総介にこそ賜は

るべきであるまいか」

と、云つた。

四郎義實は、なほ戯れて、

「やあ、そねむな老人。どれほどな手柄があつて」

「なんぢや、手柄くらべなら、和殿ごときに、おくれはとらぬ」

老人も、負けずに云ふ。

酔つてはゐるし、聞えた荒武者である。四郎義實は、顔を燃やして、

「なにを」

つめ寄ると、老人は、

「所存あらば、後日を待て」

と、云ひ放つた。

「後日とな。笑止々々。直ぐにとは、なぜ云はん。老ぼれ、海べへ出よ」

君前でもこの始末である。

頼朝も、笑つて見てゐるほかなかつた。

すると、こよひの亭主、三浦義連が、ひきわけて、

「どつちが平家か」

と、双方を見くらべながら詰問した。

双方とも、それで黙りこんでしまふと、

「せつかく、涼しう御酒興をと、殿のおいでを仰いで、義連が設けた席で、私闘は何事でも

るか。おふたり共、少し自分のお年を辨へたがい、」

と、たしなめた。

頼朝は、この日から、わけて義連に目をかけた。さすが三浦大介が子であると思つた。

さうかと云つて、頼朝は、岡崎四郎や廣常老人を、

「年がひもない者」

とも思はなかつた。

又、さういふ傍若無人ぶりを、咎めだてもしなかつた。

むしろ、老人の中にさへ、さういふ老人らしくない粗暴、率直、剛放、無邪氣といったやう

な性状が、精練されない鑛石のやうに、善悪とも有の儘にあることが、愛すべきものとさへ眺

められた。

武士。——鎌倉武士！

二八八

訓へたものでもなし、云ひ合せたものでもない、ひとつの自尊心——いや己れを持す氣概がかういふ新しい社會のうちに今、沸々と醸しかけられてゐた。

武士——武士の道。

それを、武士道などと、口やさしくは云はずに、各々が、極めて自然な行爲のうちに、行ひ出し出してゐた。

そのひとつとして。

酔つぱらつて頼朝の水干をねだつたりした岡崎四郎にも、近ごろこんな佳話がある。

彼は、石橋山で戦死した佐奈田余一の實父であるところから、先頃、その余一を討つた長尾新六が捕虜となつて來ると、

『子の怨をはらせ』

と、いはぬばかり頼朝はその囚人を彼の家に下げわたした。

ところが、捕虜の新六は、よほど佛教信者とみえ、牢舎のうちで、夜も晝も、法華經ばかり

誦んでゐた。

『こよひこそは』

と、余一の父たる彼は、毎夜のやうに、太刀のつかをしめして、牢舎の戸口まで忍び寄つたが、いつも心靜かに法華經を唱へる聲につい聞き入つて、

『いや……』

と、思ひ直しては、幾月かを、過してしまつた。

そのあげく、遂に、頼朝の前に出て、彼はかう願ひ出したといふのである。

『討ちました。——子の讐にはあらで、わが心の淺慮な怨念を刺とめて御座る。——願はくば

長尾新六のなきがらには、法衣を與へて御追放下されたくぞんじまする』

頼朝が、それをゆるした事はいふ迄もない。實に、一面には、かういふ涙もある鎌倉の人々だつた。

奥州船は近ごろ京方面の輸送をほとんど怠つて、大部分の物質を、京より近い鎌倉で荷上げしてゐた。

金銀、鐵砂、織物、漆、紙など、こゝで揚陸された量はおびただしい額にのぼらう。時には淺黄いろの同じ小旗を舳に立てた奥州船ばかりで、滑川の河口をうづめてゐるやうな盛觀も見られた。

それ等の物資も船舶も、すべて吉次の胸ひとつで動くものだった。彼にとつて今こそ待ちまうけてゐた絶好の「時」であつた。一躍、天下の富を積むべき汐どきが、頼朝の旗擧げと同時に、彼にも、商法の旗擧げを促した。

鎌倉には金がない。

坂東武者がいくら寄つたところで、武力だけで大兵を養ふ經濟力といつたら甚だ心細いものでしかない。

由來、東國そのものに、財力はなかつた。長年にわたる平家文化の絢爛は、それだけ地方の疲弊と枯渴を意味してゐる。

「鎌倉殿も、金をもつて立つたのではないからなあ。武者たちの弓にしろ矢にしろ、手作りが多いのを見てわかる。長刀、太刀でも目につくほどな物を持つてゐるのは大將たちぐらゐなもの。……さすがに馬だけは、逸物があるが」

とは、誰もいふことで、すこし商才のある者なら、鎌倉の創業景氣が經濟的には、いかに不安心なものかは、すぐ考へさせられるに違ひなかつた。

商人たちの見解もさうだし、平家でも勿論、こゝへの輸送路には手配をして禁絶に努めてゐる。

當初、經濟方面の奉行にあつた北條時政も、これにはひどく困惑してゐるとか聞いたが、吉次は、自分の手にうごかし得るだけの物資を、去年以來、すでに三、四度も鎌倉へ廻送してゐるばかりか、まだ一度も、

「價を賜はりたい」

とも、何が欲しいとも、申し出てゐなかつた。奉行の北條時政から召されて用のある時でも、彼自身はまだ出向いたこともない。いつも股肱の者を代人に向けて、時政と會つたこともない

のである。

そのくせ彼は、船が鎌倉についてゐるうちは、ほとんど船にゐなかつた。物賣や職人たちをつかまへては、巷のうはさを拾つて歩いたり、下級の兵と親しくなつて、化粧坂へ遊びに行つて大振舞をしたり、何といふ事はなく、暢氣さうに過してゐた。

三浦義連の亭で納涼の折、誰と誰とが喧嘩したとか、佐奈田余一の父の岡崎四郎は涙のある武士で、子の警の長尾新六に、情をかけて逃がしてやつたとか——さういふ上層の消息も、鎌倉ではすぐ知れわたるのであつた。まだ緊密な社會組織がないのであるよりも、鎌倉の家人階級には、まだそんな事を秘し隠しにしようなどといふ氣もちがないのである。

私行上、面目ない事は、面目ないとし、不覺だつた事は不覺だとして、恥を責められることは當然な制裁をうけることとしてゐた。卑屈な隠しだては、恥以上の恥とした。ふた口目には『恥を知れ』

とか、恥をそゞげとか、生命の次のものとして、各々がそれを珠のごとく尊んだ。法令などよりも、吉次は、そんなところから自然にできかけてゐる新秩序に對して信用を賭

けた。彼はすでに夥しい物資を、鎌倉殿へ貸したが、その手形は、時政の證文でもなし、鎌倉殿の墨付でもなかつた。

六

吉次は、どこかで義經に會ひたいものと、念じてゐた。

『ご無事か。どうか』

案じられたのである。

子のやうに、彼の將來が、吉次には憂へられてならない。

鞍馬から奥州へと、曾て、彼の大きな運命の手綱をひいて奔つた吉次は、その以後も、當然に義經の成長をよそながら見まもつてゐた。

彼は、伊豆の頼朝よりも、木曾の義仲よりも、

『この人こそ』

と、將來の大計を、義經に囑してゐた。いや、彼にいはせれば、

『九郎殿を措いては』

とさへ思つてゐよう。

今にして、彼はそれを自分の誤算とも眼ちがひとも思つてゐない。

『鎌倉殿が先に立たれたのは、地の理、御身分、年齢からいつても當りまへだ。……だが、要するに、反平家の人々は、鎌倉殿のその好條件を、旗として、持ち上げてゐるのだ。眞に、頼朝といふ人間に尊敬して盛りあがつてゐる衆望ではない』

彼はそんなふうに見る。

そして、どう現状を見ても、

『九郎殿こそ』

と、やがて一世の上にもぬき出る實力の人は、彼であるといふ見込みを變へなかつた。

『——けれど、その九郎殿の眞價を誰が知らう？』

と、考へると彼の理想の實現も甚だ遠い氣がするのだつた。

たとへば、彼と會ひたさに、それとなく、行き交ふ武者などに、

『鎌倉殿の弟君、九郎御曹子様のお住居はどこでせうか。それとも、やはり大倉郷のお館のうち、兄君と御一しよにお住ひでせうか』

などと訊ねても、

『鎌倉殿の御舎弟と？』

そんな人がゐるのかと云はぬばかり怪訝な顔をした。ほとんどと云つてよい程、義經の存在などは、下のはうには知られてゐない。

『大倉郷の内にいらつしやる』

その後、北條家へ出入する自分の代人から、それだけの消息はさぐり得たが、近づくことはできなかつた。何分にも、大倉郷一郭は、鎌倉殿の住居であるばかりではなく、東國軍の本營ともなつてゐるので、家來以外の者が立ち入ることは望めなかつた。

——で、今日も。

頼朝が三浦義連の亭へ招かれて外出すると聞いたので、その行列の中に、

『もしや、九郎殿が』

と、期待して遠くから見まもつてゐたのであるが、義經のすがたは、頼朝の前後にも、たぐさんの將士のうちにも、遂に見出されなかつた。

それから幾日か後だつた。

いつも彼がよく立ち寄る雪之下村の餅などひさぐ媼の店に腰かけて休んでゐると、由比ヶ濱のはうから馬を蹴らして八幡道へ馳けてゆく二人の若者があつた。

『兄者人。兄者人』

後の若者が、先へゆく若者を呼びとめた。そして急に、駒を止めながら、

『餅がある。この家で、餅を賣つてをりますぞ』

と、軒を指さした。

『なんぢや忠信。子どものやうに』

兄らしい先の若者は、笑ひながら振向いた。忠信と呼ばれて若い武士は、

『ひもじくてなりません。泳いだ後は、餓鬼のやうに腹がへる。それに汐水をのんだせるか喉も渴いた。——兄者人、休んで行きませう』

と云ひながら、もう鞍からとび降りてゐた。

兄弟のことばには、どこか奥州訛りがある。吉次の耳にはよく聞き分けられた。なつかしくもあり、不審でもある。

『いつたい何處の家人？』

と、眼をみはつてゐた。

由比ヶ濱へ水泳ぎに行つた歸りとみえる。兄弟とも漆をひいたやうな顔色である。何の屈託もないやうに、餅を喰ひ、湯をのみ、笑ひ興じてゐたが、

『やれ、腹もできた。弟、参らうか』

と、軒の杭につないである駒の手綱を解いて跨りかけた。

『——あ。もし』

吉次は立ち上つて、初めて兄弟へことばをかけた。

「……何か？」

と、すでに兄弟は馬上にある。

「失禮ですが、もしやあなた方は、九郎義経様について、奥州より下られた方達ではございませぬか？」

「何。……どうして、左様な事がわかるか？」

「てまへも奥州ですから。……おはなしの様子で」

「さういへば、そちも奥州ことば。——奥州はどこだ？」

「栗原郷でござりまする。多くは平泉の國府に住んでをりますが」

「ふうむ。……この鎌倉へ商にでも参つてをるか？」

「お察しのとほりです」

「名は？」

「ちと、こゝでは憚ります。お供をいたしてもさしつかへ御座いますまいか？」

「どこまで？」

と、兄弟は顔見あはせて、やゝ迷惑さうに云ふ。

「いえ、そこらの、人なき所までで」

「馳けるぞ」

「結構です」

「行かう、兄者人」

駒をならべて、兄弟は炎天へ馳け出した。畦の豆の葉に白い埃が舞ふ。——吉次は、嬬に代を與へて後から走つた。

馬上と馬上とで、兄弟は何か談合してゐるふうだったが、吉次を撒いてしまふつもりでもないらしい。やがて、雪之下をすぎ、八幡の下まで来ると、駒を下りて、杉並木の陰に待つてゐた。

「さき程は、失禮いたしました。實は、てまへは金賣吉次と申す者で」

それへ来て、吉次が改めて名を告げると、ふたりは驚きの目をみはつた。京、鎌倉でこそ、吉次の名は小さいものだったが、奥州の國府では知らぬ者はなかつた。

「吉次とは、和殿のことか」

その名に比して、何と素朴な男だらうと、兄弟は、しげく彼の風采を見直してゐたが、疑ふらしい眼ではなかつた。

「して、その吉次が、われ等に何の用があつて、呼びとめたのか」

「御曹子の九郎様に、ぜひお目にかゝりたい事があるで……實は、お手引をお願い申したいのです」

「然るべき御用があるなら、大倉郷のお館へ、願ひ出たらよろしからう」

「公けでなく、そつとお目にかゝつた方が、九郎様のお爲にも、てまへの爲にも、双方によろしいので……。てまへの名を稱つて、公然と、會つて會へないはずは御座いませんが、そこをわざとさし控へて、けふ迄、よい折を待つてゐた次第です」

「御意を伺つた上でなければ、應とも否ともいへないことだ。——が然し、同國の誼み、和殿のことばだけはお傳へしよう」

「明日も、由比ヶ濱へ泳ぎにおいでになりますか」

「分らぬが、暇があれば行くかもしれぬ」

「濱で、御返辭を、お待ちしてをりまする。……ついでの事に、御姓名をお聞かせ下さいませんか」

「それがしは、佐藤繼信。これにをるは弟の忠信だ」

ふたゝび馬上の人となると、兄弟の影は蟬しぐれの彼方へ忽ち馳け去つてゐた。

駒

一

吉次は次の日、由比ヶ濱へ来てみた。

約束の人は見えなかつた。

翌日、彼は又、同じところで待つてゐた。佐藤繼信、忠信の兄弟のすがたはその日も遂に見

當らない。

五日も七日も通つた。

『はて。あれきりだが？』

——月もかはつて七月に入つてしまつた。はや船の荷あげも商用も終つたので、彼の手代は奥州へ歸る日どりを彼に諮つた。

『さうだなあ、ついでの事に、この月の中旬には、八幡宮の御棟上があるさうだから、それを見物してから歸らうではないか』

吉次の云つた鶴ヶ岡の上棟式には、頼朝夫妻から家人の主なる人々が臨んで、ずるぶん盛大に執り行はれるであらうと、近郷の噂もなか／＼であつた。

『その事は北條殿からも伺ひました。せつかくだから、ぜひ當日の御盛儀を、よそながら拜觀してゆけ。國への土産はなしにせよと、時政様からおすゝめ下さいましたが』

『さうか。では、北條殿におねがひすれば當日、どこぞお目障りにならぬ場所で、御式の模様を拜めやうか』

『いとお易いことで。拜殿のお間近は如何か存じませぬが、鳥居内の廣場でなら、さしつかへあるまいとおことばでしたから』

『では、その日にはぜひ、わしも伴れて行つてもらはう。吉次と告げずに、船の者といふことで』

吉次は、待ちかねた。

さういふ折なら義経も必ず参列するにちがひない。繼信、忠信の兄弟が、あれきり濱にも来ないところを見ると、義経のはうにも、四圍の事情、儘にならないものがあるであらう。さう思ひやられました。

庶民は祭がすきである。鎌倉ちゆうがその日を待ちかねてゐた。新しい宮の屋根が、百年もまつりの絶えてゐた山の木々を透して仰がれるのも歡びだつた。そして大鳥居から由比ヶ濱のはうへ一條の大路が拓け、又、町屋を縫つて山内の方面へも新しい道路ができ上つて、きれいに砂がしきつめられ終つた朝、棟上の式は嚴かに執り行はれた。

吉次は、鳥居わきの駒つなぎ場に近いところに土下坐してゐた。こゝの「かたまりは、特に

拜觀をゆるされた武家以外の者ばかりだった。吉次は、前の列に、早くから坐つてゐた。

頼朝夫妻が、群臣にかこまれて、眼のまへを通つて行つた。新しく築かれた高い石段を踏み登つてゆく姿は神々しくさへあつた。眼もくらむばかりとは、その一人一人の装ひであつた。

——が吉次の眼には、その金銀の飾りも絢爛な織物も、太刀の鞘や脊に光つてゐる漆も、みな自分の生産した物を、自分で拜んでゐるやうな気がした。

あたりの人々を見れば皆、なみだを流さぬばかり心から平伏してゐる。自分のやうな考へ方は不幸であると思つてみても、遽に隨喜のなみだも出なかつたが、そのうちに、

「……あつ？」

あやふく聲を嚙みながら、ばつと面に血のいろをうごかした。

すぐ前を、九郎御曹子が——久しく見ないので見違へるばかり成人したその人が——いつぞやの繼信、忠信のふたりをつれて通つた。

義經はちらと、吉次のはうを見たやうであつた。

儘に、自分へそゝがれたと思つた眼に、吉次が、はつとしてゐるまに、もうその人は背を見せ、彼方へ歩いてゐた。

「……あゝ、お立派になつた」

彼は、眼がしらに、熱いものをたゞへた。

——何か、安心した氣もちと、自分から遠くなつたと思ふさびしさにつままれた。

「物」と「金」しか頭にないかのやうな彼も、義經にだけは、愚しいほど、情に揺りうごかされた。——子のないせるかとも思つてゐる。いや、子のやうな氣持を寄せるには怖い對象なのにと、自分の情を疑つてもゐた。

しかし何れにせよ、慾と敬愛と、折合はない二つのものを、一つ對象に抱くなどといふ例は他になかつた。義經だけが例外であつた。

「……どこかで？」

彼は猶も義經のすがたを見てもたたくてならない容子であつた。

いつのまにか、彼のすがたは、そこを去つて、鶴ヶ岡の山林へ立入つてゐた。

深い木の間に身を埋めてながめてゐると、東側の假屋に、頼朝夫妻のすがたが眺められた。

夥しい家人衆は、社域の南北に居ながれてゐる。

以前の瑞籬は、由比郷に面した南の山にあつたのだが、頼朝の入國と同時に、こゝへ造營を

開始され、をとゝひの八日までに、棟上までに運びができた。

きのふは、治承の年號が、養和と改元された日であつた。

で、改元の第二日目に、けふの棟上の式は行はれたわけである。

式が終ると頼朝は、作事に功勞のあつた二人の工匠に、賞として、馬を與へようと云ひ、座

右を見まはして、

「九郎。——九郎はいづれにをるか」

と、呼んだ。

「はい」

義經は、東側の殞の幾人目かに伍してゐたが、すぐ起つて、

「御前に——」

と、兄の座を拜した。

小兵な義經のからだだが、いとゞ小さく見えた。頼朝は、見下ろして、

「九郎か。——大工棟梁に、芦毛の吹雪と、栗毛の星額とを取らせる。そちが行つて、その馬

を、これへ引いて來い。——馬を引いて、棟梁共に與へよ」

と、いひつけた。

「……………」

義經は、俯向いたまゝ、いつまでも返辭をしなかつた。

土肥、北條、千葉、畠山など並居る人々の顔こそかへつてはつと變つた。

馬を引けとは。

しかも、大工棟梁へ、馬を引けとは。

「なんでそんな卑しい役目を、他に仰せつける人もあるのに、御曹子へは？」

人々は、頼朝の心を、推し量りかねた。——又、義經の返辭が、どうか、穩やかであるやう

に——けふのこの盛大な吉日が難なく終るやうにと——手に汗して、念じないではゐられなかつた。

「……………」

「嫌か」

頼朝の眼は小兵な弟の平伏してゐる姿へ、きびしく注がれたまゝであつた。

「……………」

義経も、無言のまゝである。

一瞬、せつかくの曠の日は、険しい雲に蔽はれてきたやうに、誰もが胸を暗くした。義経の襟の毛も微かに、わなないてゐるかに思はれた。

「九郎。なぜ起たぬか」

二度目の聲は、更にきびしい。

頼朝も亦、その言を吐くために、心のうちでは、非常な努力をしてゐるらしい顔いろであつた。

「……………」

義経は、漸く立ち上つた。——けれど、曠々しい衆人の中である。恥しさに面は上げられなかつた。

若宮の辻や、壽福寺の並木道あたり、いや鎌倉ちゆうが、うすい埃の下に、夥しい人の流れを描いてゐた。

頼朝の歸館を、今しがた見送つた路傍の人々が、行列の通過と共に、静肅をくづして散らかり出した埃である。

「あぶないつ」

「端へ寄れつ」

行列が終つてからも、後から後から二騎、三騎と絶えない蹄の音が、油断してゐる往來を脅やかした。

潤葉樹の大木が道の空まで茂り合つてゐる辻の曲り角までその一騎が來かゝつた時、つと木陰から往來へ跳り出て、

『しばらく』

と、その駒の口輪をつかんだ男があつた。

『誰だつ？』

馬上の人は源九郎義経だつた。ふたりの従者は云ふまでもない繼信、忠信の兄弟で、

『やつ、和殿はいつぞやの男よな』

『吉次ではないか、何をするか』

共に、馬前から吉次を押し隔てようとしたが、吉次は、耳もかさず、

『しばらく、しばらく』

云ひつゝ、けながら遮二無二、森の小道へと馬を引き込んでしまひ、往來の目から離れると、漸く草むらにうづくまつて手をつかへた。

『おゆるし下さい。おなつかしさの餘りです。御曹子様、わたしめで御座ります』

『オオ、吉次か』

義経は、馬を降りて、手綱を繼信にあづけ、

『會ひたいと思つてゐた』

と、云つた。

そのことばだけで、吉次は胸につかへてゐたもの總てを宥められてしまつた氣がして、何も云へなくなつた。

義経は、繼信、忠信のふたりへ、こゝで待つてゐるやうにと云ひつけ、森の奥へと、先に歩き出しながらまだ手をつかへてゐる彼を、

『吉次。來ないか』

と、振向いた。

吉次は起つて、従いて行つた。人目を避けて戀人とかくれに入るやうな祕密と似たものが五、十過ぎた男の胸をそつと揺する。秋に近い森の奥は、黒いほど縁がかさなり合つて、蟬の聲も喧しいほどではなく、所々、これこそ泉ともいふべき水溜りに、もう秋草の花が鏡の縁の唐草

模様のやうに亂れ咲いてゐた。

「こゝは、壽福寺の森かな？」

「さやうでございます」

「こゝなら誰も來まい。——吉次、そこらの石へでも腰かけるがよい。さう禮儀を執らなくてもよい」

義經は、木の切株に腰かけて、足もとから泉へ注いでゆく水を見てゐた。

「奥州にをる間も、めつたに會ふ折もなかつたが、いつも達者でよいな」

「あなた様にも」

「む、む。……」と、義經は口のあたりで微笑しながら、

「わしなどはまだ乳くさい子どもだからな。育つばかりだよ。どうだ、大きくなつたらう」

「お見ちがへ申す程でございます。しかしお恨みにぞんじます」

「何をの……」

「平泉のお館を脱けて、一圖にお急ぎ遊ばしたお心はよくわかつて居りますが、なぜ一言、吉

次にお洩らし下さいませんでしたか。吉次如きは、鞍馬の後には、もはやお役に立たぬ人間と、お見限りをうけたのかと、後では、ひがんで居りました」

「は、は、は。さうか」

とのみで、義經は、べつに云ひわけもしなかつた。

「愚痴でした。年は老らないつもりでも、つい、いけませんな。お聞きながしを。……いや、そんなつまらぬ事に時をうつしては勿體ない。けふこそは、ぜひ一つ、あなたのお胸に、入れておいて戴きたいことがございますので」

吉次は、鳥の羽音に、眼をそらした。壽福寺の丹塗の伽藍が、木々の彼方に紅葉のやうに見えた。

四

吉次は、すり寄つて、凝と、相手の面を見つめたが、その義經は、

「……何か？」

駒

とも訊ねてくれない。

むしろ放心したやうに前の泉を見つめてゐた。

吉次は、その様子を見て、ふと臉を熱くした。

義經の胸には、今なほ、澄みきれないものがあらう。その小濁りが、吉次には、泉の底よりもよく透いて見える。

けふの棟上の式に、兄の頼朝から、大工の棟梁に馬を引けと——あの曠々しい人なかで——酷い命をうけた時の氣もちは何んなであつたらうか。

(よくも、お怵へなされた)

と、無事に式の終つた後で、多くの家人衆はうはさしてゐるだが、吉次は、そんな傍觀者のことばをわざ／＼重ねてこの人に告げようなどとは思つてゐない。

むしろ彼の云はうとするのは、

(あなたは世間知らずだ。あなたは純情すぎる。あなたは餘りにお人よしだ。云ひかへれば愚人ともいへる。そして御自分を餘り粗末になさりすぎる！)

とまで、齒に衣きせず、言直したのであつた。

「……………」

——が、云へなくなつた。

云はうとする矢さき、ふと見れば義經の頬に涙がながれてゐたからである。

突然、吉次も不覺な嗚咽をもらしてしまつた。がばと、肱を顔にあてた儘、草のなかへ俯つ伏した。

「吉次。何を泣く」

泣いてゐる人が、冷然と、彼にたづねた。吉次は面をあげて、

「泣かずにをられませうか。——あなた様とて、あなた様とて、けふの事は、さぞ御無念でございませうに」

「兄のことばだ。いや鎌倉殿のおいひつけた。心外なことはない」

「嘘を仰つしやいませ」

「なに」

「あなた様が、そんな柔弱な御氣質か否か、誰よりも、吉次はよく知つてゐます。それだけに、吉次でさへも、身がふるへました。かりそめにも、源九郎御曹子には、亡き義朝様の血をうけつがれたお一方ではありませんか」

「鎌倉殿は嫡流でおはす」

「とはいへ、いかに何でも、平侍のするやうな卑しい役目を、しかも御家人たちの打揃つてゐる晴の中で、わざ／＼骨肉のあなた様へお命じなさらなくても」

「もう、その事は、云ふてくれるな」

「申しますまい。けれどこれだけはお分りになつておいて下さい。——鎌倉殿のなされた事はつきりと、故意でございませぬ。……これ見よ家人共、わしは自分の弟に對してすら、かやうにする。骨肉の情愛などにはひかれてをらぬぞと、さう故意に、あなたの面目を犠牲にして、大勢へ爲てお見せになつたのです」

「……………」

「一面に又、あなたへも、兄弟とはいへ、わが命令には、平御家人同様、絶対に服従するのだ

ぞ——と、暗に大勢のなかで誓はせたことにもなりません。まづたく政治のために、あなた様といふ者を」

「云ふたと申すに」

「……で、でも」

「政治には、私心を交へず、人事には、一點の私情もゆるさぬといふお示し。……いふことではないか。有難いお心だ」

「ではなぜ、あなた様は、あの時平御家人のやうに、歡び勇んで、大工棟梁へ馬が引けませんでしたのか。——二頭まで、馬を引きに、お起ちなされはしたが、誰が目にも、あなたのお顔は蒼かつた。惨として、泣かぬばかりな御様子であつた」

「それはな吉次……」

云ひかけて、義経は渴いた唇の顫へを齒でむすんだ。ともすれば今でも又、あふれかけさうな臉のものをそつと怵へて。

義經は、自分と兄とのあひだに抱きあつてゐる珠のごときものを、傷つけたくない。——他人から壊されたくない。

兄弟のつよい愛である。骨肉の情である。

（この世に一人の兄あり！）

とは、鞍馬にゐた頃から、又、足柄山を奥州へ越えてゆく頃から——それからの長い年月のあひだも、義經の胸にたえず醸されてゐた血液的な思慕だった。尊い珠玉だった。

『吉次』

『へい』

『おまへは、他人の眼で、又他人の感情で、ひとり無念がつてゐるが、鎌倉殿と義經のあひだは、切れない血と愛情でつながつてゐる兄弟だぞ』

『それ故に、猶』

『だまれ。——兄の鎌倉殿は、愛すればこそ、この義經を、公然とお叱りになつたのだ。愚なわしは、その大愛が、すぐ胸に溶けなかつた爲に、酷いお仕打！ 衆人の中で、恥辱をお與へなさるか、咄嗟には、むつといたしたが……よう考へてみれば、罪はわしにある』

『な、なんの科が』

『誰にも云はなかつたが、おまへはわしの奥立ちの親だ。おまへにだけは云ふ。……聞いてくれ』

『はいつ』

『わしは常々兄の鎌倉殿へ、よい顔を見せたことがない。——黄瀬川の宿で、初めてお會ひして、手を取り合つて泣いた時以來は』

『どういふわけで』

『まあ聞け。……兄はすでに群臣の上にある巔然たる時の盟主。兄の一指一眇は、世をうごかすものだ。たとへ兄弟なればとて、ゆめ押れてはならぬ。私の情愛をもつて、兄の壮志を棄し

三二〇
てはならない。……と、戒めながらも、人間は愚、つい、骨肉のお方と思ふ。日常の禮儀、形では慎んでも、心のどこかでは、つい、甘へたり、不平を思ひやすいのだ。——臣下の如くにはなりきれぬ爲に」

「ぜひない事で御座いませう。——が、御不平とは、いつたい何ういふ御不平ですか」

「なぜ一日も早く、平家を掃滅し給はぬか。平家を打亡して、父義朝をはじめ、亡き源家の人のうらみを雪いで下さらぬか。又、一鎌倉の繁榮や祭り事などさし措いて、旗擧げの初めにひろく云ひ觸らされたやうに、この國土全體の爲に、旗を中原にすゝめ、民みなが望んでゐる新しい世態をお築きにならないのか。……それを思ひ、それを憂ひたりなどしながら、兄や嫂の近頃のお生活方だの、御家人共が争つて、宏壯な居館を建てたり、飲んだり遊び明したり、私闘に日を暮したりしてゐる有様をながめると、わしの心は樂まぬ。快々と胸が鬱いでくる。——爲に、つい兄へも嫂へも、こゝ半年餘り、嫌な顔しかお見せしないやうであつた」

「仰つしやつた事がございますか。鎌倉殿へ直々に」

「さういふお話をする折はない。晝は晝で、公務にお忙しいし、夜は夜で」

「御臺所の政子様におひかれてございませうな」

うっかり吉次が口を迂らすと、義經はいやな顔して口をつぐんだ。

——と、いふのは、つい先頃のこと、頼朝がまだ配所になる時分、側近くおいてゐた龜之前といふ女性を、その後、家臣の某の家へそつと隠しておいた事を、政子の母、牧の方が知つてしまつた。

牧の方は、娘可愛さに、ついそれを政子の耳へ入れたので、ふたりの愛には、當然、大きな龜裂がはいつた。政子は、聰明なので、世のつねの妻女のやうに、徒らに泣き狂つたり醜い嫉妬は口走らなかつたが、一應、夫婦のあひだにはかなり派手な口論が交され、さしもの頼朝も彼女の正論には抗し難く、以後、彼の進退は甚しく、御臺所の監視下にあるといふ——下々にまで隠れないうはさを吉次も聞いてゐたからであつた。

六

林の外に、駒のいなゝきが聞えた。義經は、遽に立つて、

駒

「吉次。又會はう」

と、去りかけた。

吉次はあわてた。徒らに時をうつしたが、彼はまだ、云はうとする何も云つてゐない氣がした。

「あつ。もう暫し……」

「けふは忙しい。折も折、わしの姿が見えぬなどと、義經の心を知らぬ人々は、立ち騒いでをらうも知れぬ」

「では、たつた一言」

と、吉次は彼の袖をとらへて、よほど思ひきつた顔をして云つた。

「あなた様は、いつ迄も、鎌倉殿の下について、さうしておいで遊ばすおつもりですか」

「……さうしてとは？」

「でも、御不平でせう。この鎌倉の現状には」

「わしの不平は、世のうごきに對する大きな不平なのだ。……兄鎌倉殿への不平ではない。そ

ちは混同してゐる」

「るません！」

「うるさい。そちは義經に、何を云はうとするのだ」

「あなた様は、世間を御ぞんぢない。人間の複雑な心を見るにお目が若い」

「——だから？」

「失禮ながら、鎌倉殿に利用されるだけでせう。けふの棟上の式でのやうに」

「喜んで利用していただくか。それが、世のためになる事なら」

「鎌倉殿が榮華をなさるお爲でしかないとしたら、如何なされます」

「兄が、平家の二の舞をするといふのか」

「なさらぬお方と、誰が保證できませう」

「吉次！」

「……お氣に觸りましたか」

「そちは義經に、謀叛をすゝめるのか。せつかく兄が建てられた新しい陣營に、もう仲間割れ

が起るやうにと希つてゐるのか』

「希はなくとも、さういふ事實はもう起つてゐますから避けられません。——木曾殿と鎌倉殿との不和はかくれもない事です。おふたりの生ひ立を洗へば、そこに深い舊怨もあります。また、平家といふ當面の敵をひかへながらも、木曾殿は鎌倉の勢力が伸びてゆくのをよろこばず、鎌倉殿も木曾殿が旭日昇天のやうな勢で京都へ迫つてゆくのをながめて、内心お快く思つてゐないことは争へません』

「……………」

「旗あげの初めに、以仁王の令旨をいたゞき、伊豆の配所をはじめ、諸國を馳けずりまはつてゐた叔父君の新宮十郎行家様とも、鎌倉殿には、近ごろ何か仲たがひを生じてゐるとか聞きました。論功行賞の折、行家様へは領地をやらなかつたとかで、鎌倉殿を見かぎつて、木曾殿のはうへ奔つてしまつたとやら』

「……何でもない！ そんな小さい私事はみな塵芥だ。世を建直す大きな波へ浮び沈む塵芥よ。……目をくれてゐる要もない』

「まだ仰つしやるか、九郎様。——あなたも今に、その塵芥のひとつと見なされますぞよ』

「……………」

「悪いことは申しません。臍を固めてお置きなさい。元々、諸國の源氏は、鎌倉殿を中心に、一體として起つたかといふに、決してさうではありません。——たゞ春が来たので大地が芽を出しただけです。源三位頼政殿も、十郎行家殿も、木曾殿も、鎌倉殿とは根はべつに生えたもので、何の一致もありますまい』

「離せつ』

義経は、いきなり彼の手を袂から拂つて、

「根はひとつだ！ そのやうな商人には、武士の心根はわからぬ。義経は鎌倉へ、利を占めに馳けつけて来たのではない。死に場所をこそ求めに来たのだ。いかに、此身をよく死なばやと……』

云ひすてると、義経は、蟬のごとく、木の間の小道を馳け去つてゐた。

榮華散落

それから、わづか二年め。

養和の年號は、一年で更つたので、壽永二年になる。

秋も近い七月二十五日の事である。晝からひどい暑さであつたし、雨のすくない後なので、都の屋根は、乾ききつてゐた。

前の夜の夜半ごろからすでに、

『木曾、北陸の怖しげな猪武者の大軍が、もう叡山を占領し、大津山科にも滿々て、今にも洛中へ政め入つて来よう』

と、まるで地震の地鳴の次々に聞えてくるやうに、京都ちゆうを揺りかへしてゐたので、け

ふの明け方からはもう全市に庶民の影は見えなかつた。

逃げたのではない。

近郷へ避難してゆく、病人や年よりや女子どもの、續いて行つたのは、もう三日も前の京都で、今は、そんな光景すらなく、刻々と、氣味わるい静寂のうちに、こゝの死相は迫りかけてゐた。

『な、なんぢやろ？』

床下の坑へかくれたり、小屋の戸をたて籠めて、息をこらしてゐる庶民は、何か、大路の方に、物の轟きを聞くと、唾をのみ、眼と眼ばかり見あはせた。

往來まで、恐々と、様子を見に行つてもどつて来た若い男は、町屋の裏へかけこんで、手つき物まねで、喋舌つてゐた。

『——途方もない敗け軍だよ。今朝から逃げて来るのはみな平家の兵ばかりぢや。今もな、新中納言知盛様、それと重衡様などが、見じめな姿で、八條のはうへ逃げて行つたぞよ』

『總大將のおふたりを見たのかよ』

「なんの、どれが知盛様やら、重衡様やら、分るものではない。四、五百ほどの人数が、ごつちやになつて、馬も徒士も、押しあひ、揉みあひ、われ勝ちにな——」

「三位中将資盛様も、宇治のはうが支へきれず、午ごろであつたか、夥しう逃げ歸つて来たまゝぢや」

「もう防げまい。叡山の衆も、木曾殿と合體して、谷々から、太刀弓矢をとり出し、はや加茂川の上に、喊の聲をあげてゐるとやら」

「……どうなるのぢや」

床下からも、小屋の中の間からも、悲しげなうめきが洩れた。

すると、裏店の井のわきに聳えてゐる大きな櫛の木の洞から、

「どうもなりはしない！ どうならうが、京都は京都ぢや。案じなざるなよ！」

と、どなつた男がある。

驚いて、首をのぼした人々が、木の洞を指さして、一層、恐怖にかられてゐると、やがて男は、そこから這ひ出して来て、空地のまん中へ立つた。

「誰ぢやろ。この近所で、見たこともない人だか？」

怪しみながら、その男を見まもつてゐると、男は、

「平家が追はれ、ば木曾殿が京都に入る。木曾殿がよい政事をなさらなければ、又、鎌倉殿が来て代らう。——其鎌倉殿もいけなければ猶、次の軍勢が来て治めよう。こゝ暫くの討ちつ討

たれつは仕方がない。そのうちに、平家でない次の世は、かう行くのだと、方向を教へてくれる。——お前がたは、その善い人をよいと稱へ、悪い代人だつたら正直に悪いといひ、こゝ

の土と一緒にゐればよい。何が起つても、どう上のものが革まつても、京都の土に變りは來ないのだから——」

どこか、奥州訛りのあることばだつた。

乳のみを抱いて、小屋の中に交つてゐた職人の妻らしい年増の女が、

「あ……。あの人は、見たことがある。白拍子の翠蛾さんの旦那さまや。奥州の吉次とかいふ人によく似てゐるがの」

と、そばの人達へ囁いた。

「ホ、翠蛾さんの？」

「翠蛾さんではなから、妹の潮音さんの旦那である」

「どちらにしても、あの白拍子の家に五、六年前までは、時折見えたことのある奥州の大商人とやらにちがひない」

頻りと、自分のすがたへ眼をそよぎ、指さし合つて、密々いふ邊りの聲に、吉次も氣がついたか、急に間がわるさうにして、

「いや、わたしは旅の者で、どつちみち京都に長居はしてゐないが、まあ、今の世の大きな變りやうは、京都だけの事ではない。日本ぢゆうは地つゞきだからの」

さう云つて遽に、家と家のあひだの細路地を出て行きかけたが、又ふと、引つ返して来て、誰へとはなく訊ねた。

「お前がたのうちで、誰か、知つてゐる者はないか。この表の通りに住んでゐた白拍子の翠蛾

と潮音の姉妹は、どこへ逃げて行つたらうか」

「……………」

「實はこゝ六、七年も、あの姉妹の家を訪ねてゐないので、近頃の様子は知らぬが、姉も妹ももうかなりな年配。しかるべき男でも迎へて、身をかためてゐれば結構だが、この騒ぎに、どうして居るか、實は案じて立ち寄つたわけだが、住居は空家、猫の子もゐない」

「……………」

知らないのか、知つてゐても、他人事どころでないといふのか、誰も皆、黙りこくつて、どこかであつた、ましく聞える野良犬の聲に氣をとられてゐた。すると、人々の頭の上で、

「あつ？ 煙が」

と大聲がした。

屋根に上つて這つてゐた職人らしい男が下へ向つてどなつたのである。

「たいへんだぞ。七條、八條、池殿、小松殿、泉殿、東は二條三條のこゝかしこからも、いちどに黒煙が揚りはじめた」

「えつ、煙が？」

人々は、どよめき出した。

床下にも小屋の内にも居たたまれなくなつて、どや／＼空地へ群れ立つた。嬰兒が泣く、女たちが呼び交す。——そして見るまに、その人々の上には、疾風雲のやうな黒煙が、太陽を赤くいぶして、空いちめん擴つてゆく。

「いよいよ、木曾勢がなだれこんだか」

老人たちが、唇をふるはせた。後から屋根へ上つて行つた三、四名の男たちは、

「まだ、木曾勢は加茂を渡りもせぬに、大路は、平家衆の馬や車がなだれ打つて、西へ西へと落ちて行かれる」

と、手をかざし、

「あれよ、六波羅も火、西八條からも、大きな火の手が立ちのぼつた。——平家衆は都を焼きすて、逃げたのちや、わしらも、こゝらに居たら焼け死ぬぞ！」
もう片々と、黒い火の塵が降つて來た。

經文切の灰。

燃えちぎれた錦欄。

火の鳥のやうに、火を曳いて飛んでゆく無数の黒點が、どこへその火を移さうかと、煙の空を、翔けめぐつてゐる。

「死ぬぞつ」

「焼け死ぬぞ」

諸々の路地からあふれ出た庶民の群は、悲鳴と號泣をあげながら、大路の辻へ押しあつた。陽の光りも煙につままれたまゝ、七月二十五日の夕は、夕方のあいろも措かず、いきなり阿鼻叫喚の夜に入つた。

一門の第宅十六ヶ所をはじめ、六波羅の相府、西八條の一郭、そのほか繁昌と權勢をきはめた幾多の榮花の殻に、平家は自ら火を放つて、その夜、西國へ立ち退いたのであつた。

三

榮花散落

三三三

三三二

かうも早く、自分たちの没落が迫つて来ようとは、平家の誰も思はなかつた。ことしの四月頃には、まだ／＼わが世の春と、うら／＼かに、酔つてゐた。

義仲征伐に、北陸へ向けた維盛や忠度からは、

『戦へば、勝つのみ』

と、いつも連戦連勝が報じられて来るし、鎌倉の頼朝は、あれきり東國にゐてうごく様子もないし——と。

それが、礪竝山の一戦で、義仲の奇計に、いちど敗地にまみれてから、形勢は急轉直下、變つてしまつた。

逃げ足立つた平家軍を、追ひに追つて、木曾勢は、加賀、越前を突破して長驅、近江まで追撃をゆるめずに来てしまつた。

——と、思ふまに、この月二十二日には、もう湖水を渡つて、叡山に據り、平家一門の屋根を、眼の下に見て、

『もう、いつでも』

と、攻略の手配を完全にとつて、それから二、三日の餘裕すら示してゐる敵であつた。維盛、通盛、忠度、資盛などの諸大將も、今はすべて洛中へ逃げもどつて、

『どうすればよいか』

を、宗盛以下の一門へ諮ることしか知らなかつた。

——知らなんだ！

今となつて、彼等は、ため息ついて、後悔の臍ばかりかみ合つた。

つい目と鼻のさきに、朝夕榮花の日の手枕にも眺めてゐた叡山の大衆までが、

『木曾に味方しようとは』

と、怨みがましく、彼方の嶺を見つめるのだつた。

平家の敗色が明瞭になると、丹波邊でも、吉野でも、いちど平定した畿内の反平家分子も、

又一齊に、騒ぎ出した。

いや、それらの事々よりも、平家一門の驚愕と、大きな失意は、院のお行方が、ゆうべ二十

四日の夜半ごろから、まつたく知れない一事であつた。

宗盛以下、評議の末、

「このうへは、京都を捨て、太宰府へ立ちのき、あの地にある一族の家貞や貞能等をも併せて後事を圖らう。——瀬戸内海一圓には、故入道殿の扶植された御恩徳も浅からず、平家に加擔の豪族も多いから、われらの第二の地盤として、勢をもり返すことも至難ではあるまい」と、いふのに意見の一致を見て二十五日はもう洛中から總退却と決してゐたのであるが、今朝になつて、

「法皇には、昨夜おそく、ひそかに院を忍び出られ、鞍馬より横川を経て、義仲の陣營にあてられてゐる延暦寺へ御幸あそばされてしまふらしい」

との事實が分つた。

これも寢耳に水であつた。

元より宗盛たちは、自分たち一門の退却と共に、後白河法皇のお供をしてゆく豫定でゐたことは云ふまでもない。

「何たる不覺を」

と今更、自分たちの不用意に気づいたり、天をうらむが如く呟いてみたが、何もかも後のまつりである。

そこで、この上はと、畏れ多くも建禮門院が手に、まだお幼い主上を抱きまゐらせて、御同輿の出御を仰ぎ、内大臣宗盛父子や平大納言時忠など、重なる人々は衣冠、そのほか、武臣はもとより、公卿殿上人から端仕への人々まで、すべて、弓矢甲冑を帶し、けふ卯の刻、七條朱雀を西へお供申して行つたのであつた。

その後、

平家は、平家自身の榮花の寢床を各々の手で焼きはらつて、立ち退くだけとなつてゐた。

四

——かういへば平家の退却は、豫定のもとに、秩序整然と行はれたやうにもあるが、それは御幸のあつた時刻の前後だけでいよいよ残る一門が、各々の第宅に火を放つて、

「それ、お後をしたへ」

榮花散落

三三七

三三六

と、わが身わが身の始末と、取り残されまいとする先を争ふ最後になると、

『これが、きのふ迄、わが世の春を誇つてゐた貴顯か』

『これが、きのふ迄の都か』

と、怪しまれるばかり、淺ましい喧騒と混雜が、火焰と煙のちまたに描きだされた。

『落ゆく先とて定かでない。いたづらに家具什器をたづさへても荷になることぞ。何も持つな。たゞ弓矢と駒のみを大事に持て』

かういふ令は、きびしく達しられてゐたにか、はらず、いざとなると、馬、車に積めるだけの財寶を積まうと焦心つてみたり、遽に坑を掘つて、土中へ金銀をかくしてみたり、井の底へ、家寶を投げ入れて、又京へもどる日もあるればと、儂い先のたのみをつないでみたり——爲に、刻々と迫つてゐる生命の危険も忘れて、一門の退京は、思ひ／＼に遅れてゐた。

早くも、素ばやい盗兒は、焰をくぐつて、空巢をあらし廻つてゐる。

宵になると、洛中數十町のあひだは、焰々と、軒をつらねて、火をふいてゐた。

そのため、辻の口から押し返す者と、後から押ししてくる馬、車の人なみとが、殺し合ふやう

な混亂を起してゐた。

『——お館さま？』

『中將様？』

『どこにお在しますか。いかゞなされましたか』

『時移してゐる間に、退き口もみな、焰につゝまれますぞ』

『先なる御一門が、お姿が見えぬとて、いたくお案じです。——いづれにお渡りあそばしますにや』

こゝは三位中將維盛の第宅であつたが、明りもなく人氣もない館のうちを、土足の郎黨らしい者七、八名が、交々に聲をからして呼び廻つてゐた。

察するところ、主上に供奉して先發した宗盛の一行が、維盛の安否を憂へて、侍たちを見届けによこしたのであらう。

『こゝぢや。こゝにおいでられる——』

暗い寢殿のあたりで、人聲がした。近づいてみると、廣縁から階の下まで、大勢の人影が、

寂として、うづくまつてゐる。

赤い夜空には、いちめん火の粉が舞つてゐる、天體が大きくうごいてゐるやうに見える。凝と、うつろな眼を上げたまゝ、誰も彼もだまつてゐた。一つとして、生きてゐるやうな顔はない。

さがしに來た侍共は、その氣はひに、何かハツとしたやうに、あわてゝ庭へ下りた。そして畏る畏る一族の左少將有盛、侍從忠房その他の公達や郎黨のかたまつてゐるそばへ這ひすゝんで、そつと訊ねた。

『……いかなされましましたか。もう洛中も、あのとほりで、残つてゐるお館もありませぬが』
すると、ひとりの公達が、寢殿の奥を指さして、

『……お名残りがつきぬのぢや』
と、囁いた。

維盛卿の北の方は、故中御門大納言の御女で、美人の聞えたかい麗人であつた。まだ幼い和子たちもあつた。そのため一しほ別離のかなしみは深く、北の方のすゝり泣く聲が、さつきから綿々と洩れ聞えて、人々の腸をかきむしつてゐたのである。

また、維盛も、斷ちきれない煩惱にもだえて、女々しいことばを繰返してゐた。

『かくては』

と、卿の弟新三位資盛や備中守師盛たちは、泣きまどふ北の方や、幼な子たちを引き離して、漸く、維盛を擁してそこを立ち出たが、かうした別離はひとりこの館だけにあつた事ではなかつた。

野性

一

法皇を奉じて、義仲は、京都へ入つた。

彼は、昇殿をゆるされた。

勿論、政治に參與した。

野性

のみならず、法皇の御意をさへ歪めがちで、もつばら我意をふるつた。彼の我意が、政治のうへに現はれてくる。

期待してゐた民衆は失望した。――が、旭將軍の権力と威風の下に、暗い顔の啞になつてゐた。

『平家は朝敵である』

義仲は、西國へ落ちた平家一門の官爵を奪りあげた。

――天下一日も主なかるべからずと、九條兼實の議によつて、高倉天皇の第四皇子御鳥羽天皇が御踐祚になつた。

『事々に、おれの意見は、朝に用ひられない』

義仲は、粗暴をあらはしはじめた。

彼は、以仁王の御遺志となへて、王の御子北陸宮をお立てしようとして主張してゐたのである。幾日か、参殿もしなかつた。

彼の部下たちも、それ／＼任官してゐたが、いづれも粗野な北國者たちである。文化に對す

る理解が浅い。

平家の治下に、これは亦、餘りに逸樂すぎる末期的な生活と制度に押れてゐた民衆と――武骨一點ばりで、民心の作用も、文化の本質も、よく咀嚼しない我武者の吏とのあひだに、のべつ喰ひちがひが起つた。反目が醸された。――平家から置さ去られた民衆は、源氏へすがつてみたが、忽ち、源氏からも望みを失つてしまつた。

そればかりか。

洛中に充ちてゐる北國兵は、やがて糧食や物資の不足から、暴を働きたした。

守護するはずの兵が、民家に押入つて、酒を掠め、女をいちめ、食物を奪りあげて、

『何を』

ふた言めには、権力で脅しつけた。

――一方。

平家はひとたび九州へ落ちたが、この人々も、多年の生活がまだ身にしみてゐる。やゝもすれば、都が戀しい。

殊には、建禮門院をはじめ、婦人たちは一しほ嘆く。

太宰府を、第二の根據地に、とは宗盛以下の最初の決心だったが、徐々、勢力を挽回してくるにつれて、ふたゝび、都へ都へと、移動して来た。——その時期の餘りに早かつたことはいふ迄もないが、ぜひもない勢であつた。

南海、山陽の大兵を募つて、本營を讃岐にうつし、屋島に安徳天皇の行宮をたて、やがて都へ攻め上らうとしてゐる——

平家の動靜は、刻々、義仲の耳へはいる。義仲は、

『すておけない』

と、遽に軍備して、平家討伐のため、山陽へ下つた。

ところが、先鋒の足利義清が、備中の水島で、平家のため、惨敗してしまつた。

それに氣の腐つてゐるところへ又、京都方面の情報によると、

(法皇には、鎌倉の頼朝をお召になつて、ひそかに、何かお諮りになる御意らしい)

と聞いたので、彼は、

(この義仲をさし措いて)

と即日、戦を抛つて、都へひつ返してしまつた。

歸つてみると、自分の腹心と思つてゐた新官行家も、法皇の御信任に誇つて、自分へ反目してゐるやうである。

彼の不安は、狂躁を加へてきた——彼が、法住寺殿を焼いたり、公卿の官爵を思ひのまゝ、剝ぎ奪つたり、自ら院の庶の別當と稱したり、さながら清盛入道の悪いところだけを眞似たやうな、小さな暴王となり出したのは、その頃からであつた。

.....

それが十月末頃の京都の實狀であつたが、以來、鎌倉の頼朝は、何が傳へられて來ても動かなくつた。義經もその下にゐるのか居ないのか、世間に消息も聞えなかつた。

二

いつのまにか、時代の勢力は、三つに分れてゐる。

野 性

京都を中心とする義仲と。

山陽、四國にある平家のまだ侮れない舊勢力と。

それと、こゝ鎌倉——と。

京都も中國方面も、外交に、政争に、軍備の擴充に、物々しく動いてゐるが、鎌倉の靜かなことは、

『どうしたものか？』

一頃の頼朝の迅速ぶりと思ひくらべて、怪しまれるばかりであつた。

『近ごろは、御臺所との御仲も、至極、御圓滿さうに見える』

と、いふ噂は、その問題を氣にしたがる家人衆のあひだでも一致した觀測であり、それと共に、

『あのはうの御手腕にかけても、人すぐれた所がおありとみえる』

などといふ——悪い意味ではない陰口が——臣下のなかでほゞ笑ましく囁かれたりしてゐた。

が、さういふ無事と見えるなかに、鎌倉そのものは、實は大きなものを生みかけてゐたのである。

平家が行つて徹しなかつた武家政治に、頼朝は、自分の理想を加へ、民衆の力も盛つて、施政のうへに、今までなかつた新しい方法を見出さうと腐心してゐた。

その一つ二つの現れとして、公問所とか、問注所などといふ役所を設けた。

そこでは、政治をきき、司法上の裁きをし、役人には、大江廣元とか、三善康信などをおいた。

廣元も康信も、長く京都にあつて、政務には熟練してゐる文官の逸材である。

彼は、自分には難しいと思ふ部門には、舊勢力のなかからでも、人材を抜いて、重用した。

しかし、彼の信念は、

『野性を失つてはならない。新鮮とか、革新とかいふものは、健全な野性のもつ生活力だから。——と云つて、反省も洗煉も持たない野性では、義仲のやうなものになるし——餘りに野性を失へば又、平家になつてしまふ』

その中庸に彼の理想はあつた。——だから彼は、軍務、警察をかねた侍所などには和田義盛といつたやうな、もつとも剛骨な武人を別當として、

『まづ、武士から先に、庶民への模範を、その實生活で示すやうに』

と、云ひわたした。

頼朝は、武士たちへ、武士道を求めた。それを誇り磨きあふやうに仕向けた。一面に又、

『いかに民心を得るか』

を、大江廣元にたえず諮つた。

だが彼は、この創業期において、大きな見のがしをたゞ一つしてゐた。——それは彼自ら東國の一方に據つてゐたせるもあらうが、歴史の極りない轉變と地上の變貌のみを思つて、この國土が、いかに亂に遭つても、いつか歸一し、いかに紊れても、忽ち不滅の體にかへるか——それを政治の力に過信しすぎたことである。

だから、やがて彼の創めた體制は、大いに士風や民心を一時革めて、いはゆる幕府政治とし

ての新味も出し、鎌倉文化なるものをも生みだしたが、その以後、北條、足利などの先例をも作つてしまつた。

——といつて頼朝といふ一臣民が、他の國民にくらべて、決して、朝廷に奉ずる念がうすかつたわけではない。彼も亦、朝廷への忠勤には、心を傾けた武將といへるひとりである。しかし人間は往々、餘りに大きなものは、かへつて、うかとし易いものである。

たとへば、人はよく空を仰ぐが、仰ぐたびに、太陽と自己の生命との關係を考へたりはしないやうに。

三

『はて。誰がよいか』

頼朝は、考へてゐた。

彼にとつて今、彼自身がいふところの健全な野性が、遽に必要となつて來たのである。京都、中國、鎌倉と、三分されてゐる天下の勢力を、

野性

『わが手に』

と、考へる時、それが容易な事でないにつけ、誰をして、その難事業に當らせるか——見まはすところ多くの武將のうちにも、さう人はなかつた。

後白河法皇からひそかなお召きもあつたが、彼は、義仲のゐる京都へ上る氣はなかつた。

彼の身はもう鎌倉からたやすく動けないものになつてゐる。

鎌倉を空けて、彼自身が、義仲と平家の二勢力を、一掃しにゆくなどといふ事は、いかに望んでみても、夢にすぎない。

『……人はないもの』

と、頼朝はつくづく思つた。

大軍をまかして、安心できるやうな老將には、義仲を討つ覇力が足りない。元氣に富む若武者ばかりでは、軍令が行はれまい。議論倒れになりやすい。旁々、京都へ入つてから、義仲の二の舞をやられても困る。

『義経なら……』

頼朝は、知つてゐる、見ぬいてゐる。——あの弟の素質を。

久しく鞍馬や奥州に培はれて来た健全な野性と、又、血には、自分と同じ父をもつて、よく野性と叡智とを一身に調和してゐる彼の性情を。

『彼ならば、自分の代官として、大軍の上に立たせても、みな服従するだらう』

その點もうなづいてゐた。

けれど、頼朝も亦、義経を考へる時、どうしても義経を一臣下として、考へきれなかつた。

わけの分らない感情がからむのである。——あまり義経への衆望が、高まりすぎても困ると思ふ。彼への服従が、彼への忠誠になつたりすると、今、漸く緒についたばかりの鎌倉に分裂の下地を招くやうなものと憂へられてもくる。

さうでなくても東國の武士は感情にうごきやすく激しやすい。單純な所がある。征馬遠く東國から離れて、長い年月、戦場で艱苦を共にし合つてゐるうちには、どうしても、

——死なば共に。

と、骨肉以上な、つよい情愛にもむすばれてくるものである。

『どうしたものだらう？』

頼朝は、迷つてゐた。

——が、その事ばかりは、妻の政子へも、舅の時政へも語らなかつた。そこにも彼の用意があつた。妻の一族の誰彼をふり顧つて考へると、

『やはり誰よりも、義経こそ、信頼のできる自分の弟だ』

と、血は水よりも濃いといふことばに、氣がつくのだった。

その義経は今、鎌倉にはゐなかつた。使の途中、近江の佐々木ノ庄に逗留してゐた。

『さうだ。やはり弟に命じるべきだ。思ひ迷つてゐるも愚……』

頼朝は、心を決めた。

決意は短時日に迫られてゐたのだつた。なぜならば、彼の手許には、後白河法皇の密勅が、それより幾日前に人知れず届いてゐた筈であるから。

途中の人

一

義経は、それより少し前に、

(——東國の年貢を朝廷に上るの使)

として、貢の荷駄に、五百騎ほどの従者をつれ、兄の命をうけて、京都へ向つてゐた。

尾張の熱田の宮前で休息してゐると、

『源九郎御曹子ではないか』

と、聲をかけた旅人がある。

『あ、これは』

義経は近づいて、先の禮儀に、急いで會釋した。

途中の人

供も二、三しか連れてるないし、姿も見ちがへられたが、それは後白河院の北面の下藤公朝であつた。

『いづれへお旅立ちですか』

『東國へ』

『東國は？』

『鎌倉のあたりまで』

と、公朝は、何か意味ありげに、にことして見せた。

振向いて、宮の森を指さし、

『御参詣は』

『たゞ今、参拜をすまして、これに休息してをるところですが』

『では、そこまで、お顔をかして給はらぬか』

公朝は、供の者をそこへ殘して、もう先へ歩いてゆく。

問ひたい事は、義經にもある。

義經は、忠信、繼信の兄弟へ、何かさゝやいてゐるだが、すぐ一人で公朝の後を追つた。

十月末の空は澄んでゐるが日蔭はいと寒い。杉木立のふかい中に、葛もみちだけが赤く眼

に映る。

神前に坐つて公朝は、長いあひだ禮拜してゐた。

義經は、つい今し方、先に参拜をすましてゐるが、こゝに立つと又、さつきも想ひ耽つた多

感な追憶にふたゝびつゝまれた。

十六歳であつた――

こゝで貧しい加冠の式をして、吉次と共に、奥州へ下つて行つたのである。

吉次といへば。

どこかそこらの物陰から、今にも彼の男がひよいと出て來さうな氣がする。

『いや、お待たせした』

公朝は、膝の座を拂つて、義經に近づいて來た。そしてあたりを見廻しながら、相手の耳近

くへ、

「御曹子、近日のうに、きつと、あなたのお身上にも、大きな使命が下りますぞ。……かう申せば、もうお分りでせう」

「……では、鎌倉への御用は」

「私事の用向ではありません。……院のお使として、それも極く密かに」と、いよく聲を落して、

「人になおもらしあるな。實は鎌倉殿へ、御院宣をお傳へ申すために下る途中なのです。義仲の暴状は、もはや一日も捨ておられない迄になつてゐる」

「さうですか」

「静な面であつた。——が義經のそれには、ほの明るい血がさし上つてゐた。」

「貢のお使にお上りですか」

「さうです」

「御入浴は待たれたがよい。危険です。——それに、それがしが鎌倉殿へ着く日もまもない」

義經の眼は、何か、迷つてゐるやうに見られた。

「いつそ、それがしと共に、一應鎌倉へお引返しあつては如何ですな」

「さうはなりません」

「——さもなくば、早々、海道の源氏に、用意を命じ、お手勢とあはせて、京へ迫るお支度を

ひそかに進めておかれるもよい」

「いえ、何事も、兄のいひつけが下らぬうちは出来ません。……やはり貢の荷駄を曳いて、京

都へ参るといたしませう」

云ひ断ると、義經は、その事にはむしろ觸れたくないやうに、

「——それよりも、あなたにお伺ひしたい事は」

と、話を反らした。

「それがしに、お訊きになりたい事とは？」

公朝が問ひ返すと、義経は、やゝ面ぶせに、暫く云ひ出しかねてゐるが、

『兄の圓濟には、無事でをられませうか』

『オ、八條宮の坊官圓濟どのか。お變りもなくお過しのやうに聞いてをるが』

公朝は、答へながら、義経の眸をとほして、この人の血につながる人々をふと思ひうかべた。

後白河法皇の皇子八條宮に坊官として仕へてゐる郷公圓濟といふのはそのむかし、平治の亂の雪の日、常盤の手にひかれて生死をさまよひ歩いた幼子たち三人のうちの一人なのである。

あの時——五歳であつた乙若がその坊官圓濟で、今では、八條の法親王に仕へてゐた。

いちばん上で、當時七歳であつた今若は、その後、醍醐寺に入つて、これも出家し、禪師全成と名のつてゐるが、氣が荒いので、惡禪師といはれ、今は醍醐にもゐらず、消息もよくわからない。

(——やはりさうした兄弟たちが、幾歳になつても、戀しいのであらうな?)

公朝は、思ひやつた。そして、義経の何か怖れ憚つてゐるやうな眸へ、もう一步、立ち入つてかう云つてみた。

『御曹子……。あなたが、お訊きになりたいのは、圓濟どの、お便りもさる事ながら、もつと他の御方のことではありませんか。あなたの生みの母御前常盤どののその後の御消息を知りたいのでせう』

『……………』

常盤——といふ一言を聞くだけでも、彼の血、皮膚、髪は戀しさにをのゝき疼いた。その胸の中のを公朝に指さゝれたとたんに、彼は何の見得もない一箇の痴兒となつて、

『……そ、さうです。お察しのとほりです。何ぞ、母の身について御存知なればお聞かせ下さい。兄圓濟へもよそながら、書狀にて、問ひ合せてはみました——出家の身、世事何事も辨へぬ。とのみ、素氣ない御返事を一度下されただけでした』

『素氣ないのでは御座いますまい。宮のおそば近う仕へる身、御無理はありません。——それに又事實、常盤どのお身上とて、京都の大きな變りやうと共に、何もかも押流されて、今で

は平家方について行かれた多くの公卿衆のうちに在るやら、誰ぞの領所を頼つて田舎へお引籠りやら、恐らく知る人はありますまい』

『この世に生きておいであることは、慥でせうか』

『さあ、それとても、如何なものでせうか。お互にいつ知れぬ身ですから』

『嘆きはしません。もし、御病氣か何ぞで、もはや世に亡いものなれば、世を果てたと、お教へください』

『さういふ事がないにしても、なほ世にある御方と、あなたがさう戀ひ慕はれるのは、お察しはできるが、おまちがひでせう』

『……まちがひ？』

『牛若どの、乙若どの、今若どの——さう三人の和子が生命を守り終つて、母としてなされる苦患も務めをも成し果された日から——常盤どのの恐らく御自身でも、すでに世にない身ぞと思ひ極めておいではなかつたでせうか』

『……』

『世間はみなさうお察しして、陰ながらわれわれ迄も、美しき前世の御方よ、と密かに稱へてゐるのです。——その後、誰の妻になつたであらうとか、幾人の子を生じたであらうとか、そんな噂はあつても、別人の事としか聞かれませぬ。他人ですらさう思つて居りますのに……御曹子、それでも猶、あなたは強つて、もう一度、生ける人にひき戻して、敢ないお苦しみをその御方にかけたいと思ひますか』

三

測らぬ人に行會つて、測らぬ想ひは義經の胸に増してゐた。

その公朝と熱田で別れ、彼は京都へと上貢の旅をつゞけてゐた。

雨の日が多く關ヶ原あたりの河川は氾濫し、旅程は、おくれがらだつた。漸く、不波の關へかゝつて、湖畔をたどつてゐた日である。彼の一行を、早馬が追ひかけて來た。

鎌倉殿のお使といふ。

『何事か』

途中の人

と、書状を披いてみると、極めて簡略に、
 入浴の儀は暫し見あはせ、佐々木ノ庄に滞留あつて、再度の沙汰を待つやうに。
 とある。

思ふに、院の密使公朝が、鎌倉へ着いたその夜か翌朝にでも、すぐ出した早馬にちがひない。

義経は、心のうで、

『……時が来た！』

それをどんなに彼は待つてゐたことか。

彼は小さいもう一つの悩みを——公朝にも打明けた乳兒のやうな心の奥の泣き聲を——切り捨てなければいけないと思つてゐる。

大乘をもつて、小乗を。

大志をもつて小我の迷ひを。

まだ見ぬ母を一目でもと戀わづらふ過去への儂い痴兒のこの悩みを。

『お目にかゝる事が倅せか。お目にかゝらぬはうが倅せか。——愚よ。公朝が云つたとほりだ』

義経は湖のうへを行く片雲を見た。道の邊の冬草を見まはした。——在りやなしや。母はそこはかとなく居もする。すでに亡い氣もする。

『この世におはすとも、おはさずとも、義経が、人として、爲す事を爲さば、いづこかで御覽あらう。亡父義朝も……』

近江路は、源氏のものゝふに取つて、恨み多く、胸傷む思ひ出の道である。

こゝらの草木、こゝらの水の邊——何を見ても保元の亂に崩れ去つた義朝や一族の當時のすがたを偲ばせぬものはない。

『——が、こんどは』

義経は、身のうちに、血ぶるひをおぼえた。

佐々木ノ庄は、湖畔の安土老蘇、金田あたりの一帯をいふ。佐々木源三秀義の舊領で、彼の定綱、盛綱、高綱など兄弟たちの故郷でもある。

その本郷山に、以前のまゝな古館がある。義経は貢の荷駄や五百騎と共に駐まつて、ひたすら鎌倉から二度目の急使が訪れるのを待つてゐた。

十一月になつた。

まだ来ない。

月も中旬に近づいたが、何の沙汰もないのである。

この間の彼の焦躁は、はた目にも寔れの見えるほどだつた。すぐ目と鼻の先の京都では、法住寺殿の焼打とか、その他、限らない義仲の狼藉やら秩序の亂脈さが手にとる如く聞えてくるのに、鎌倉の方からの風のたよりには、

『院宣を奉じて、いよ／＼鎌倉殿にも、軍勢を催されてをらるゝが、義仲追討の總大將には、やはり北條殿がお立ちになるらしい』

とか、又、

『いや、千葉介殿か誰か、御家人のうち優れた老將をさしそへて、御弟の蒲冠者範頼どのお立てになるさうだ』

などと眞しやかなうはさが頻々として傳へられ、その噂のうちに義経の事は、義経といふ名さへ語られてゐなかつた。

鎌倉殿の弟君といへば、誰もすぐ蒲の殿かと合點する。その範頼のあることを知つても、義経といふ弟もあることは、まだ世間に知る者は稀だつた。

名馬

一

あれほど義経に對しては、思慮をめぐらし過るほど氣を勞ふ頼朝も、同じ弟でありながら、範頼に對しては、さほどでもない。

『心して参れよ。陣中は、何よりも軍律を嚴に。賞罰をあきらかに』

『はく』

名馬

『このたびの一戦こそ、大事なうちでも大事な戦ぞ。ひとり源家の興亡だけにとまらぬ。天下はこゝで分れてゆく』

『よう心得てをります』

『その心得顔が、まちがひの因だ。常々のごとき心構へではならぬ』

『はい』

『義仲もさる者ぞ。侮るな。——木曾、北陸の猛者が相手であるぞ』

『張合があります。死にばえが御座います。決してお名はけがしません』

いよいよ義仲討伐の軍勢が出發といふ朝方である。

頼朝は、華やかに扮装つた範頼を側近く招いて、門出の神酒をくみかはし、その後で、こんな事を云ひきかせてゐた。

『そちを瀬田口の總大將に、義經を宇治川のはうの攻口の大将に命じたのも、頼朝の心のあるところ、不覺をとるなよ』

この弟へは、何をいふにも氣の措けない姿である。

範頼も亦、何事にも兄への服従と慎みを怠らない。

故義朝の第六子にあたり、母は池田の宿の遊女とかいふ。藤原範季の手に養はれてきたが、頼朝の旗上げと聞いて、その翼下に馳せ参じたのである。

『……不覺をとるなよ』

今、頼朝がさう云つたのは、義經に負けをとるな、といふ意味のものと、範頼はうけ取つたので、

『弟には負けません』

と、温順な彼も、いさゝか心外なやうな顔色を示して答へた。

すると頼朝は、そんな顔色を見てもやらず、頭から云つた。

『——戦の駆引は、そちより、遙に、義經の機略がたち優つてをる。京に攻入る二つの攻口では、瀬田より、宇治川のはうが難しい。それ故に、義經をさし向けたのである。不覺をとるなとは、その上にも、名折れをすなと申したのだ』

『はい。……分りました』

範頼は二言もない。

その他、細々と、注意をうけて、彼は出發した。——とはいへ、馬上、大軍の上に立てば、自ら威もある。彼は、將として弱いのではない。氣負けといふか、兄の前に坐ると弱いだけだつた。

義經のところへも、早、飛狀が着いてゐる頃である。

範頼と途中で會へ。

攻略の軍議して、ふた手にわかれよ。

何事も、兩翼となり、仲よく謀り合つてせよ。兄弟の不和は、敗れの因ぞ。

——二人の兄として、頼朝はさういふ點まで書き添へた。

範朝の立つた後から、なほ、續々、關東の大名小名は、令をうけて、西へ上つてゆく。——

上る途中には又、必ず鎌倉へ立ちよつて、頼朝に謁し、各々、

『生きて、再び歸らん心も候はず』

と、名残りを告げたり、

『屍は何地へ捨て候とも、名こそ惜く候へ。あはれ、口ほどに、よき死に方をしつると、必ず沙汰されてお見せ申さん』

などと、去る者、去る者の姿、悲壯でもあり、潔くもあつた。

そのうちにも、梶原景季は、頼朝の前へ、別辭をのべに出たついでに、大膽な無心を申し出た。

『御秘藏の名馬生唆を、それがしに拜領させて下さい。この度、宇治川の先陣をいたすに、この景季を措いて誰がありません。——それには、生唆が手ごろの乗料とぞんじますので』

二

頼朝は、やゝ呆れ顔した。

生唆は、誰も知る頼朝が秘藏の愛馬である。御家人の面々は、みな目をつけてゐるが、どんな功があつて望まれても、それだけは惜んでやらなかつた。

『膽太い無心をいふやつ』

呆れ顔が、やがて苦笑になる。

景季は、そこを押して、

『何とぞ。何とぞ』

と、頭を下げた。

馬を乞ふために、頭を下げるのは、どんなに下げても、武士の恥でも卑屈でもなかつた。同時に、馬を惜んでやらない大將も、決して物惜みとは笑はれなかつた。

當時の武風である。その頃の戦には、馬の偉力は唯一の器械力であつた。心ある武士ほど良馬を持たうとした。世に聞えるほどな名馬とあれば争つて自分の料にしたがつた。

わけて、こんど義經の手について、宇治川の渡河戦に當るものは、まづあの激流とあらゆる障碍に耐へ得るほどな馬をと、心懸けてゐない者はない。

奥州、東國は名馬の産地だし、坂東武者はみな馬術に熟練してゐる。その中に伍して先陣の名のりを克ち取るのは容易なことではない。

『おれを措いて誰が！』

と、景季の抱いてゐるやうな自信は、それに加はる五千騎はみな持つてゐるであらう。人も人だが、馬も馬だ。

『いかゞでせう』

景季は、押強く、面をあげて頼朝へ肩で迫つた。

『生唆はいけない』

頼朝は、笑ひだした。

『八ヶ國の大小名みな眼をつけてをるが、あれのみは許さぬ。蒲冠者にすら與へずにあるのだ』

『さればこそ、たつて景季が望みでござる』

『いや、頼朝みづから出陣の日までは、厩におく』

『可惜！』

景季は舌打して、

『合戦中は、夜ごと、名馬が厩で悲しませう。この千載一遇の秋につながれて置かれては』

『云ふわ、憎態を』

頼朝は、愉快になつた。彼の押太さに負けてやりたい氣がした。

『つかはさう』

『えつ、賜はりますか』

『——が、生唆ではないぞ。生唆にまさるとも劣らぬ磨墨のはうを遣はさう』

『ありがたう存じます』

景季は、満足した。

誇らしかつた。

『——宇治川の先陣は、おれのもの』

もう十分な自信があつた。

聞くならく、こんどの合戦に、鎌倉殿のお厩から曳き出された逸物には、義經の料にとて薄

墨——乗更駒に青海波。

範頼には一霞と月輪。

御家人たちのうちでは、熊谷次郎直實の權太栗毛は自慢の駿足であるから、こんども彼を曳

いたであらう。畠山重忠にも、秩父鹿毛とか、大黒人とか、妻高山鹿毛とか、評判な名馬がある
るので、さためし選りに選つて、競ひ立つて行つたにちがひない。

『だが、磨墨には、どれも及ぶべくもない』

箱根、足柄と、各々郎黨や駒をひきつれて西へ忽ぐ他の部隊をながめても、磨墨ほどな逸物

は見あたらない。

景季は、途中、駿河の浮島ヶ原に、軍勢を休めて、磨墨に草を飼ひながら、自分も草に脚を

投げてゐた。

——すると彼方の道を、何者の部下か、三、四人して、生唆を曳いて通つてゆく。自分の眼

のせるではないかと、ぬつくと起ち上つて、

『……はてな？』

眸をこらして見たが、どう見ても紛れのない、名馬生唆にちがひなかつた。

何か、景季からいひつかつて、馳け出して行つた郎黨は、彼方の道を、生唆を曳いて通つてゆく者をつかまへて、訊きたゞしてゐるが、程なく、景季の前へ、馳け戻つて來た。

「やはり生唆であらうが」

「左様でした」

「して、誰の部下だ、あの者たちは」

「佐々木家の御家人と承りました」

「佐々木……佐々木の誰」

「高綱どので」

「馬も高綱のものか」

「鎌倉殿から拜領なされたとかで、この毛艶はどうぢや、馬品の美しさよ、などと舍人共まで誇らしげに自慢してをりました」

「高綱はまだ通らぬな」

「やがて後より見えられませう」

「……よし」

顎を振つて、又草のなかへ坐りこんだ。

景季の顔いろは穩かでなかつた。

「あれ程、自分の所望したものを……賜はらぬはせひないにしても、佐々木の末弟などにおやりなされるは、當つけがましい。御偏頗なお仕打でもある」

死場所へゆく途中である。さなきだに血は荒ふる。激し易くなつてゐる。

「人の口端にも笑はれぐさだ。恥ある侍ふたり刺し交へて、鎌倉殿へ、御偏頗なお仕打のお返しをして見せうか。……いや待て。それとも高綱めが、生唆の事を知つて、殿を巧みに泣き落したのかもしれない。とすれば、殿をお恨みしては相すまぬ。高綱をこそ」

諸將の部隊が過ぎてゆく。

景季は、待ちかまへてゐた。

そのうちに、佐々木隊が通つた。高綱のすがたも馬上に見えた。

「おう、い。佐々木殿」

名馬

景季が呼びとめた。

高綱は、列を脱けて、歩み寄つて来た。

「やあ、其許にも、このたびは源九郎様の手について、宇治川へ懸られるさうな。ひとつ御陣ぢや、よろしく頼む」

「む、む」

先の顔いろが明るすぎるので、景季は、自分の不快な眉や唇を一應處理して、笑ひをにじみ出しながら云つた。

「おたがひだ。ところで、佐々木殿、先にこゝを曳かせて通つたのは、生唆と見たが、お上から拜領なされたのか」

「あ。あれか」

高綱は、につと、景季のひとみを見つめながら、自分の頬のあたりを、右の掌で一つ打つた。

「見つかつては是非もない。實を吐くが、他言して給はるな」

「敵いたのではないのか」

「何うして、あれを下さらうぞ。——出陣の眞際、恥しいが、良い馬に事を缺き、思案にくれたあげく、お厩の御料一匹おねたり申さうかと考へたが、もし、下された馬がさほどの逸物でなかつたら、合戦に臨まぬうちから、我れのみ負れをとる。……まゝよ、後で御勘當うけたら、功名と差引。討死いたしたら、香華の代りと、おあきらめ下さらう。……さう考へてな、盗み出して来たのだ。暗夜、ひそかに御厩の内から」

「えつ、盗んで来た」と

「所詮、われわれ風情では。正直では名馬は得られぬからな。あは、」

「盗み居つたとは。——いや、押太さにも、上には上のあるものよ。アハ、」

高綱は笑ふ。

景季も笑つてしまふ。

手をたゝいて、二人は笑つた。

もうそこに何のわだかりもない。

「御免。——また戦場で」

名馬

高綱は先に行つてしまつた。すこし彼の方が人が悪い。

實のところ生唆は盗んだのではない。やはり頼朝からもらったのである。けれど頼朝に口止めされてゐたので、咄嗟に出たらめを云つたのだつた。

隙のないやうに見える頼朝にも、相手の接し方に依つては、あれほど惜んでゐた名馬でも、つい與へてしまふぐらゐな甘さもあつた。

木曾殿

一

ひとりの女性性は、衣を打被いだまゝ、燈火から遠く離れて、泣き伏してゐた。

黒髪のかなかに埋めてゐる横顔の白さが、この薄暗くて又どことなく殺氣のみなぎつてゐる殿中には、餘りに白くをのゝいてゐる。

「だまれつ。——妖怪のやうに細々と泣くなつ。泣くなら大聲で喚け」

義仲は、酒を仰飲つてゐた。

燈火のせるか、どす赤い顔に、眼が大きく光る。

年は三十一。巨軀を持つてゐる。

決して醜惡な容貌の部類ではないが、公卿や宮中の女房たちが恐れることは甚だしい。

『やめないか』

『……………』

そこに泣き伏してゐるのは、彼の妻といふのも、氣の毒な——前關白基房のむすめであつた。

義仲に懸想されて、強奪されて來た妻である。こゝへ來てからは泣いてばかり暮してゐた。

——泣くもよしと、雨中の花を見るやうに眺めてゐた義仲も、やゝ、あぐねて來た眼いろである。

『どうしたな、使者は。……けふは晝にも立歸るはずだが』

木曾殿

つぶやいて、後を見た。

三名の侍が、木像のやうに、固く坐つてゐた。

義仲の焦躁から出る——何うしたな——の嘆息とも呟きともつかない間は、夕方からの連發である。

答へやうがなく、

『……されば、もはや』

と侍たちも、同じことを繰返すしかない。

『枕……枕をもて』

ごろりと、横になる。

『はつ』

と、侍のうちから一人が起ちかけると、義仲は、強く手を振つて、

『いゝ！ 起つな！ そちにいひつけたのではない』

と、泣き伏してゐる人の黒髪を指さして、

『おいつ、枕を取つて来い』

『……』

『關白の女だから侍女のするやうな業はせぬといふのか』

疝癪の半分は酒の聲である。

かう怒つてばかりゐる彼ではないのであるが、きのふ今日はわけて、彼の性格の良いところは少しも出さなかつた。

いやもう少し遡つて彼を観ると、この夏七月、兵を擁して、堂々と、平家が退去した後へ入浴して來た時は、得意でもあつたらうが、もつと落着もみえ、こんな魁異な大將には思はれなかつた。

それが、日の経つにつれて、狂暴になつた。義仲の性格にも、もちろん悪い血があればこそだが、ひとつにはこの京都に平家が、残して行つた文化の殘滓やら人心の悪氣流やら政治の組織やらも、義仲の神經をひどく醜弄したり疲らせましたのである。

たとへば、院の女房たちにしても、彼が衣冠した姿を見れば、をかしくもないのに笑ふ。笑

ひこけて隠れこむ。

公卿堂上人の冷たい目も、彼の前には立たないで、薄暗い物陰からのみ隙見してゐる。

『いかにして笑はれまいか』

だけでも、木曾殿の神経は疲れたにちがひない。

それを通り越したので、

『笑はば笑へ』

彼は、憚らなくなつた。木曾山中の飛鳥走獸がそのまゝ、院中をも洛中をも横行した。

爲に、都の文化も秩序も亂脈に墜入つたが、實は、義仲もうろたへに圍まれてゐた。彼は渴

望してゐた都の文化や中央の府が、こんな厄介なところは豫期してゐなかつたのである。

『こんな厄介ものを、平家も戀々とし、頼朝も欲しがりぬいてをる。ばかなやつ等』

もう抛り出してしまひたい。ほんとに彼はさう思つてゐる。彼には割あひに偽りはない。

だが、頼朝の権力を入れる事は意地でもできない。平家に負けて押出されるものなほ嫌である。顔としておれは顔張る。――それが彼の胆だつたが、刻々、周囲の形勢はゆるしさうもな

い。それも彼は自覺してゐた。

二

夜も更けた。

どこかで馬の嘶きがする。

宿直の登音が、つゞいて聞えた。宵から、うたゝ寝のまゝ横たはつてゐた義仲は、

『なに、覺明が歸つたとか』

がばと起きて、坐り直した。

『たゞ今、戻りました』

大夫房覺明は、旅装も解かず、そこへ來て、燭から遠く坐りかけた。

『寄れ。もそつと近う』

持ちかねてゐた義仲は、さしまねいてすぐ訊いた。

『どうだつた、平家方の意向は――。和議は調つたか』

木曾殿

『調べて参りました』

覺明の答へに、

『さうか！』

と義仲は、まづほつとしたと云はぬばかりの顔いろだった。

義仲は今、窮地にあつた。

東軍は大舉して、瀬田口や宇治方面から迫ると聞えて来るし、平家も水島の大捷に勢をもら返して、京都奮回を目標に、潮のごとく、山陽を北上して、先鋒の一部はすでに、兵庫に上陸して一の谷あたりに集結してゐるといふ。

この險惡な象のなかに、義仲は年暮から初春を迎へ、何の策もなく、わづかの酒の勢で、
『なんの、頼朝づれが』

とか、

『範頼、義経ごときが』

とか、氣焰のみ上げてゐるが、朝夕、彼の販賣が多くなつて来たのは、もう酒では誤魔化し

きれない現實が、漸く、彼の目にも、さし迫つて觀えて来たからであつた。

——で、義仲は、腹心の大夫房覺明を使者として、平家方へ、和睦を申し込んだのである。

『背後の憂さへなければ』

と彼は、この苦しい體制で、今の窮地が、打開されるものと信じてゐた。

われながら、窮餘の一策、とは思つたが、武門の醜態とは考へなかつた。

彼の擁してゐる北陸や木曾の猛兵のあひだには、まだ新しい『武士の道』が昂揚されてゐな

かつた。鎌倉に集つた新時代の若武者たちが、早くも、次の時代をうけもつ資格を自覺して、

互に、節義を磨き、恥を尊び、文化の建設と歩調を一にしてゐるのと較べると、彼等はたゞ強

いばかりを能として、そのくせ、その勇猛をも弱める都會の美衣飽食や女色には、まるで脆い

弱點を、餘りに多く持つてゐた。

義仲をはじめ、その部下は、多分に人間的で、赤裸ではあつたが、武士としては、匹夫の勇

にすぎなかつた。軍としては、當然、この京都を維持しきるだけの性能はなかつた。

『——やすめ。大儀だつた。細かい評議は明日としよう』

木曾殿

覺明の報告をきくと、義仲は、寢所へはいつた。

翌る日。——それは元暦元年の正月十日、義仲は、後白河法皇を奉じて、北陸道へ落ちよ
うと企てたが、それは、失敗に終つて、その日も、彼の身邊は、酒と、區々な軍議に暮れてし
まつた。

すると、夜に入つて、近江へ入れておいた物見から報らせがあつて、

『宇治口へまはつた義經の軍勢は、わづか一千餘騎にすぎない』

と、いふ事が聞えて來た。

次の日の朝、又、

『近江に集結した東軍も、思つたほどの大軍ではなく、士氣も至つて奮つてゐない』

との報らせだつた。

義仲は、日のたつほど、

『思つたほどでもないらしいな』

と、樂觀して來た。

かういふ際にまた義仲は、不自然な榮進をした。征夷大將軍の宣下をかうむつたのである。

今にもと氣づかはれた東軍のうごきも、その後は、思ひのほか緩漫である。

『宇治川の急流や瀬田の要害を見ては、坂東武者も、さすがに二の足をふんだにちがひない』

義仲は、その天險も恃みにしてゐた。洛中の情勢も平穩だし、院のお覚えもよいし、すべ

てが好轉してゐるかのやうに、自分の位置を、ひと先、安心しきつて來た。

その心理が、

『河内を先へ討て』

となつた。

河内にも、自分の敵が、蜂起してゐたのである。

その主謀者は、頼朝を離れていちど自分につき、又、不平を抱いて自分から離反した新宮十

郎行家だつた。

兵七百を割いて、樋口兼光を、その方へさし向けたのである。

——後に思へば。

この七百の兵力を割いたのは、彼にとつて重大な用兵の失策であつた。

なぜならば今、洛中にある彼の兵力は、三千に足らなかつた。

今井兼平を將として約九百の軍勢を瀬田の防備に向け、また根井行親を大將に、約千二百の兵を宇治のふせぎに繰出した後は、わづか三百ほどの兵しか京都には残つてゐなかつた。

その三百の兵をひいて、義仲自身は、院の御所を守護してゐた。

心ある者の眼には、

『あの將軍の心には、一體、何を恃むものがあるのか？』

と、怪しまれるほどだつた。

また、時の人々は、彼が平家へ和睦を申し入れた心理をいぶかしい事として、義仲の心をいろいろに忖度した。

平家こそは、源氏にとつて、石にかじりついても崩しられない累代の仇敵ではないか。何の

ために源氏の兵は、けふまで臥薪してきたのか？

さう問ひたいのであつた。

けれどそれは、血縁といふものの特種な感情を解さない人のことばであるといふ者もある。

血は濃いものであるが故に、その血の近い同族が争ふことになる、他人と他人の憎悪より

は、烈しいのが常である。傍からは窺ひ知なれない血液と血液とが搏撃する。利害にかゝはらず

共倒れも怖れないところまで行く。

だから、同族中で、その主體たらんとする一人があれば、自分の腕と知りながらも切つて取

捨てる。自分の指と知りながらも断つて患を除かうとする。——古來、主體の人が、冷血とい

はれるのは、さういふ思ひきつた事をも敢然となしうる強力な精神が、その覇業のうへでは認

められても、民衆の道徳や人情には、受けいれられない爲であらう。

そんな公卿たちの評も聞かれるほど、院の御所も平穩であつた。洛中の庶民も、戦争に馴れ

て來たのか、こんどは平常とさう變りなく商もしてゐた。

けれど、眼を轉じて。

三九〇
瀬田口の前線を見れば、その水路も道もまったく遮断されて、湖をよぎる鳥影もなかつた。

更に、宇治川方面の防禦のきびしさはいふ迄もない。きのふの朝も今日の朝も、雪は低く、へうへうと寒風をふき落して、橋板の引かれた橋杭に、白いものさへ積つて、陽が高くなると消えた。

馬筏

義経は、河邊に立つて、

「水練の達者なものは名のり出でよ。河底へ潜つて、逆茂木へ縦横に張りめぐらしてある荒繩を断ち切れ。——われと思はんものはないか」

と、味方を顧みて云つた。

そのことばも終らないうちに、彼方此方で、

「おうつ」

「おゝ！」

と、兵ばらの奮ひたつ答へが聞えた。

澁谷右馬允のそばにゐた一家臣などは、具足を脱ぐのに誰よりも迅速だつた。眞つ裸になつたかと思ふと、義経の前を馳けぬけて、もう眼の前の奔流へ跳び込まうとしかけた。

「待て〜」

義経は、手をあげて、後からつゞく者へも、注意した。

「春とはいへ、水は冷たい。雪のある山々にも近い故、恐らくこの流れは身を切るほどだらう。そち達、水練には巧者でも、素肌では、寒烈な水底で、長い働きはできまいぞ。肌着のみは、着けてはいれ」

宇治川も變遷してゐる。